

14.5

225

14. 5-225



1200501215472

日本貿易協會經濟調查會
パンフレット第六編
我對印輸出の現狀と發展策



始



社団法人 日本貿易協會 經濟調查會
パンフレット 第六編

我對印輸出の現狀と發展策

社団法人 日本貿易協會

14.5-225



凡例

- 一 本篇に掲載せる貿易統計は列國との比較を知る爲に主として印度關稅局の調査になる留比にて示してある。本邦の分のみは大藏省發行大日本外國貿易月表に據り、その他特殊の統計にはそれぞれ出所を明記してある。
- 一 價格は多く千位未滿を切捨て、あるから細別の合計と總計とは一致しないものが多い。
- 一 本篇中、意見に涉る部分はずべて筆者の責任にある。

發行所寄贈本



我對印輸出の現状と發展策

目次

一 我が貿易に於ける印度の地位	(一)
一 印度市場に於ける列國の勢力	(六)
一 對印貿易に於ける英國衰頹の原因	(一四)
一 我が對印輸出概観	(二〇)
一 對印綿製品の輸出大勢	(二五)
イ 生地綿布の輸出	(三)
ロ 晒及び加工綿布の輸出	(六)
ハ 綿糸の輸出	(九)
一 昭和七年度の對印輸出綿製品の狀況	(四六)

昭和七年

- 一 印度の綿製品保護政策 (五二)
- 一 綿糸、布以外の重要對印輸出品 (五)
- 綿メリヤス (五)
- 絹 布 (六〇)
- 人造絹布 (六三)
- セメント (六五)
- ガラス及び同製品 (六八)
- 機械類 (七一)
- 樟 腦 (七三)
- ビール (七五)
- 靴 類 (七九)
- 珐瑯鐵器 (七)
- 眞鍮板 (七)
- 陶磁器 (七九)

主要統計表

- 一 對印輸出に關する二三の促進策 (八九)
- 一 英印特惠關稅の我が對印輸出に及ぼす影響 (八六)
- 洋傘及同部品分 (八五)
- 玩 具 (八三)
- 紙 類 (八一)
- 木 材 (八一)
- 一 對米、支、印本邦輸出額 (二)
- 二 對米、支、印本邦輸入額 (四)
- 三 昭和元—六年對印輸出入比較 (五)
- 四 印度輸入商品別 (七)
- 五 列國對印輸出入比較 (九)
- 六 對印主要輸出國の勢力比較 (二)

七	英帝國及諸列國の對印輸出割合	(一三)
八	一九二九及び一九三〇年印度の綿織物輸入數量	(一八)
九	昭和四—六年本邦對印輸出品別價額	(二〇)
一〇	英國の綿糸及綿製品製造及輸出	(二六)
一一	英國の綿織物地方別輸出累年比較	(二九)
一二	主要國の綿織物輸出累年比較	(三〇)
一三	印度の綿布生産、輸入、消費高	(三一)
一四	對印本邦綿布輸出種類別表	(三三)
一五	對印本邦生地綿布輸出高	(三四)
一六	英、日、印の生地綿布輸出高比較	(三五)
一七	對印晒綿布輸出國別	(三七)
一八	對印色綿布輸出國別	(三七)
一九	日英印三國の晒及加工綿布輸出高比較	(三八)
二〇	日支印紡績錘數比較	(四〇)

二一	對印綿糸輸出國別	(四一)
二二	昭和七年一月—九月本邦綿織物輸出高	(四七)
二三	昭和七年一月—九月本邦綿糸輸出高	(四七)
二四	本邦綿織物の原糸生産高に對する割合	(四八)
二五	昭和七年一月—九月本邦綿織物輸出主要國別	(四八)
二六	一九二九年乃至一九三二年日英綿布の對印輸出狀況並に孟買紡績生産高	(五七)
二七	列國のメリヤス對印輸出比較	(六〇)
二八	列國の綿布對印輸出比較	(六一)
二九	列國の人造絹布及交織布對印輸出比較	(六三)
三〇	一九三一年一月乃至一九三一年二月本邦人絹織物對印輸出月表	(六四)
三一	セメント對印輸出國別	(六六)
三二	本邦硝子及同製品對印輸出内譯	(七〇)

我が對印輸出の現状と發展策

我が貿易に於ける印度の地位

我が外國貿易を相手國別に見ると、輸出入共に米國、支那並に英領印度(以下單に印度と稱す)による處が多いのであつて、之等三ヶ國との貿易總計は、輸出に於ては總額の約七〇%輸入に於てはほとゞ六〇%に達して居るから、之等三大市場の景氣如何は、直ちに、我が貿易全般に影響する處の少なくないのは周知の通りである。即ち昭和六年度の輸出に於て見ると、對米輸出四億二千五百六十三萬圓は、輸出總計に對して三七・八%に當り、對支輸出(關東州並に香港を除く)一億五千五百七十五萬圓は同じく一三・五八%に當り、而して對印輸出一億一千三十六萬七千圓は同じく九・六三%に相當して居るのである。其他の諸國にありては、蘭領印度の五%英國の四・五二%を最とし、爾餘の諸國は僅かに一%強を數へるに過ぎない状態から

見ても米支印の三大市場が我が貿易に取りて如何に重要な地位を占めてゐるか、分るであらう。而して我が對米輸出の大部分を占むるものは、謂ふまでもなく生糸であるが、生糸の需要は主として米國の景氣如何によつて増減し、積極的には容易に進展し得ない憾みがある。また我が對支貿易に至つては連年の日貨抵制に累せられて益々減少し、向後とても恐らくは容易に挽回し得ないものと思はれるのであるが、獨り對印貿易のみは幸ひに不景氣の影響をうける事も割合に少なく、昭和五年度の一億二千九百二十六萬二千圓に對し、同六年度は一億一千三十六萬七千圓(一四・六%減)を輸出し得た位であるから、我が輸出の全體に對する對印輸出の重要性は益々加重して來たのである。即ち之等の關係を知る爲に、最近三ヶ年間に於ける對米支印輸出價額と輸出總額に對する割合を表示すると左の通りとなるのである。

第一表 對米支印本邦輸出額(單位千圓)

米 國	價 額			輸出總額に對する割合		
	昭和四年	同 五年	同 六年	昭和四年	同 五年	同 六年
	九一四、一〇一	五〇六、一一四	四二五、三三〇	四二、五四%	三四、四三%	三七、〇八%

支 那	三、四六、六五二	二、六〇、八二五	一、五五、七五〇	一、六、一三	一、七、七四	一、三、五八
關 東 洲	一、二四、四七六	八六、八一四	六五、五四一	五、七九	五、九〇	五、七一
香 港	六、一〇、六五	五五、六四六	三六、七五四	二、八四	二、七八	三、二〇
英領印度	一、九八、〇五六	一、二九、二六二	一一〇、三六七	九、二一	八、七九	五、六三

大藏省貿易月表による

即ち對米輸出が昭和四年の四二・五四%より同六年の三七・〇八%に減じ、對支輸出が同期間に一六・一三%より一三・五八%に減じたのに對して、對印輸出は昭和四年の九・二一%より同五年には多少減少して八・七九%となつたが、同六年度には却つて九・六三%と増加を示して居るのを見ても、我が輸出貿易上に於ける印度市場の重要性を窺知し得るであらう。

次に輸入貿易に就て見るも、また輸出同様に、米支印の三ヶ國が重要市場となつてゐる。即ち昭和六年度の輸入總額に對して、米國二七・七〇%支那一・七九%印度一〇・七八%となり、次いでオースタラリヤ、英國、蘭領印度の順位となつてゐるが、表示すると左の通りである。

第二表 對米支印本邦輸入額 (單位千圓)

	輸入價額			輸入總額に對する割合		
	昭和四年	同 五年	同 六年	昭和四年	同 五年	同 六年
米 國	六五四、〇五八	四四二、八八一	三四二、二八九	二九、五一%	二八、六四%	二七、七〇%
支 那	二〇九、九七五	一六一、六六六	一四五、六九七	九、四七%	一〇、四五%	一一、七九%
關 東 洲	一六六、三二二	一二一、四〇五	九〇、一六五	七、五〇%	七、八五%	七、六〇%
香 港	六〇七	五三八	四九八	〇、〇二%	〇、〇三%	〇、〇四%
印 度	二八八、一九	一八〇、四〇五	一三三、一六五	一三、〇〇%	一一、六六%	一〇、七八%
大藏省貿易月表による						

我が對印輸出輸入貿易は明治十年の輸出輸入合計五十二萬三千圓を最初として爾來今日に至るまで累年異常の發達を重ねて來たのであるが特に世界大戰に際して英國を主とし、爾餘のヨーロッパ諸國の對印輸出が著しく減少したるに反して我が輸出は急激なる伸展を試み、大正九年に於ては輸出輸入合計五億八千七百萬圓となり、誠に驚異的記録を示したのである。其後、ヨーロッパ諸國の輸出力恢復と相まつて我が對印輸出は幾分の減少を見たのであるが然かも大體より見る時は我國は印度の對外貿易上、英國に次いで第二位の重要地位を占めて居るのである。

我が對印貿易を見て何人も奇異に感ずる事は、貿易開始以來、今日に至るまで約五十五年間を通じて間斷なき輸入超過を示してゐる事である。貿易を開始せる明治十年には十四萬餘圓の出超であつたが、其後は年を追ふて入超額を増加し、特に大正八、九年に至ると二億二百萬圓以上の入超を示し、更に同十四年には四億十五萬圓といふ驚異的入超となつてゐる。尤も同年度は我が對印貿易の最も増進したる年であつて、即ち輸出は最高記録たる五億七千三百萬圓、輸入も同じく最高記録たる七億四千六百萬圓に達したのであるが、其後は輸出入共漸次に減少して今日に至つたのである。尤も世界大戰後に於ける日印貿易の大勢は概して輸入よりも輸出が旺盛であり、従つて入超額の比率は漸次に減少し、昭和元年以降は左表の通りとなつてゐる。

第三表 昭和元一六年對印輸出入比較 (單位千圓)

	輸 出		輸 入		合 計	入 超
	昭和元年	同 二年	昭和元年	同 二年		
	一五五、九五二	一六七、五八〇	三九一、一三六	二七〇、五九二	五四七、〇八七	二三五、一八四
	一四六、〇〇六	二八五、四六七	四三一、四七四	一三九、四六一		
同 三年						五

同 四年	一九八、〇五六	二八八、一〇七	四八六、一六四	九〇、〇五〇
同 五年	一二九、二六二	一八〇、四〇五	三〇九、六六七	五一、一四二
同 六年	一一〇、三六七	一三三、一六五	二四三、五三二	二二、七九七

大藏省貿易月表による

六

かくて、我が貿易上に於ける印度の地位は益々重要となつて來たのである。我が貿易の主要相手國の順位より見ると、戦前五ヶ年の平均に於ては、米、支、佛、伊、香港に次いで第六位を占めたものが大戦後に至ると、米支に次いで第三位を占むるに至り、特に昭和四、五年度の輸入に於て印度は遙かに支那を凌駕するに至つたのである。

印度市場に於ける列國の勢力

印度の輸入貿易が健實なる發展をなすに至つたのは十九世紀の後半よりであるが、大戦前五ヶ年間は十五億一千七百萬留比に達し、一九一四年三月末(年度末)には戦前の最高記録である二十億留比に近い額に達したのであるが、この間に於

て、印度内地の製造工業も漸次に發達し、自然輸入品の種類に顯著なる變化を示したのである、即ち原料品の輸入は總額に對しては尙ほ一〇%に満たないが、戦前に比して著しく増加し、また製造品の輸入は大戦以來、一般に低落の傾向を示して來たのである。

然し印度に於ける製造品の輸入は尙ほ總輸入の約四分の三を占めて居るのであるから、印度は明らかに製造品に對する最大市場の一である。我國の如く、原料を輸入して製造品を輸出する國に比して、印度は全然反對の建前にあるのである。

第四表 印度輸入商品別 (政府用品を含まず、價格單位、百萬留比、割合%)

戰前平均	食料品、飯料品 及びタバコ		原料品		製造品		其他		總額	
	價格	割合	價格	割合	價格	割合	價格	割合		
戰前平均	二一八	一四、九	一〇一	六、九	一、二八〇	七六、七	二一	一、五	一、四五八	一〇〇
戰時平均	二六四	一七、八	九九	六、七	一、〇八二	七三、二	三三	二、二	一、四七八	一〇〇
一九二七—二八	三七二	一四、九	二五六	一〇、三	一、八二六	七三、一	四四	一、七	二、四九八	一〇〇
一九二八—二九	四六一	一八、二	二二六	八、九	一、八〇三	七三、一	四四	一、七	二、五三三	一〇〇
一九二九—三〇	四〇三	一六、七	二三三	九、八	一、七二八	七三、一	四四	一、七	二、四〇八	一〇〇

Review of Trade of India 1929.

即ち一九二九—三〇年度に於て、原料の輸入九・八%に對し、製造品は實に七・八

七

%に達して居るが、その主なるものは棉織物であつて、これは戦前に於ては輸入総額の約三五・八%を占め、製造品輸入額の四六・八%に達したのである。印度内地に於ける織物業の發達は幾分この相對關係を變化させたもの、尙ほ製造品輸入總量の三五%内外を占めて居る、その外の輸入品としては、機械、鐵及鋼、車輛類の輸入が一般に増加して居るが、これは印度に於ける工業の發達を反映して居るものである。翻つて印度の對外貿易上に於ける我國の地位を見るに、大戰前後より今日に至る間に於て甚だ顯著なる變化を示し、輸出入共に極めて重要な地位を占めて來たのである。即ち大戰前の輸入に於ける我國の地位は英、獨、チャワ、米國に次いで第五位、輸出にありては英、獨、米の次位を占めて居たのであるが、戦後に至ると、輸出入共に第三位に進み、近年に至ると、更にその地位を進めて、輸出入共に英國に次いで第二位を占むに至つたのである。日印貿易は單に我國の貿易上より見て重要な許りでなく、印度の貿易上より見るも我國の地位は近年益々その重要性を加へ、特に英國の對印輸出の減少と對比して考察する時は、一層の興味を覺えるものがある。即ち最近數年間に於ける列國の對印貿易を比較して見ると、實に左表の

通りであつて、英國の趨勢と日本の進出が最も顯著なる對照を爲してゐるのである。

第五表 列國の對印輸出入比較 (各年とも三月末に終る會計年度、單位百萬磅)

列國	印度への輸入		印度より輸出	
	一九二五	一九三〇	一九二五	一九三〇
英國	一〇四・二	八二・一	七三・四	五〇・〇
カナダ	〇・七	一・四	一・七	一・八
南アフリカ	〇・六	四・三	五・三	四・三
南アフリカ	〇・四	〇・五	二・〇	一・七
近東	五・九	二・六	二・六	二・三
セロン、海峽植民地	四・七	六・〇	一六・九	一六・〇
其他英領地	二・二	一・四	六・八	七・二
合計	一一八・七	九八・三	一〇八・七	八三・三
蘭領東印度	一一・二	一一・一	三・〇	四・六
ドイッ	一一・七	一二・五	七・七	一九・九
オランダ	二・二	三・二	六・〇	六・八
ベルギー	五・二	五・四	一一・五	九・一
フランス	一・九	三・四	一五・六	一二・六
イタリア	二・九	五・三	一七・六	八・七
近東諸國△	三・四	四・四	三・六	六・六

支那	二・一	三・一	二・〇	七・二	九・八	五・八
日本	一・二・八	一・七・七	一・〇・〇	四一・四	二四・二	一〇・五
米	一〇・八	一三・四	九・六	二五・七	二七・二	一〇・四
其他諸國	六・一	九・五	七・二	二二・三	二一・〇	八・八
合計	七一・三	八九・〇	五二・三	一八一・〇	一五〇・五	六五・四
總計	一九〇・〇	一八七・三	九四・八	二八九・七	二二三・八	一六六・九

× モーリスアス島を含む、△ イラク、イジプト、アラビア、ベルシヤ The Economist 4,637 2428。

即ち英本國にては一九二四—二五年に於て印度輸入總額の五〇・五%、英帝國にては六〇・二%を占めて居たものが、一九二九—三〇年に至ると、右の割合は前者四〇・四%、後者五〇・三%に減少したのである。戦前五ヶ年間の平均に於ては英本國は印度輸入總額の平均六二・八%を供給し、特に印度の輸入する製造品の内その七五%は英國の製品であつたが、一九二六—二七年に至るとそれが五五%となり、單にその輸入總額に於て減少した許りでなく、製造品——主として綿織物に於て著しくその支配的地位を失墜して來たのである。これは印度の貿易が世界的に解放された結果として明らかに避くべからざる傾向と見られるが、最近に於ける物價の低落を考ふる時は、英國の對印輸出の減少は價格の減少以上に甚しいものが

あるのである(印度貿易に於ける國際間の競争参照、經濟月報所載、原文はカ)。
 對印輸出に關係ある主要國の輸出割合(輸入總額に對する)を見るに大要左表の如く、ここにもまた英國の著しい頽勢に對して、日米兩國の著しい進出を見る事が出来るのである。

第六表 對印主要輸出國の勢力比較

	戦前平均	戦時平均	戦後平均	一九二四	一九二五	一九二六	一九二七	一九二八	一九二九
英帝國	六九・七	六五・四	六五・二	二二・五	一九・一	一四・九	一四・六	一四・一	一五・七
日本	二・五	一〇・四	六・九	六・九	八・〇	七・一	七・二	七・〇	九・八
米	三・一	七・〇	八・五	五・七	六・七	七・九	八・二	六・九	七・三
瓜哇	六・四	七・八	六・八	六・三	六・二	六・二	五・九	六・五	五・七
ドイツ	六・四	七・七	二・八	六・三	五・九	七・三	六・一	六・三	六・六

Review of the Trade of India for Recent Years 2428。

即ち我國は戦前平均の僅か二・五%より戦時中には一〇・四%に進み、一九一九—二〇年の好景氣時代には尙ほ九%を維持し、最近數年間の割合は七%以上を保ち、一九二九—三〇年には再び増加して九・八%に進み、英國に次いで第二位を占めてゐる。次に米國もまた戦前平均は僅かに三・一%に過ぎなかつたが、戦時中には七%に進み、一九一九—二〇年には一二%に躍進し、最近はやゝ其地位を低めたが、一

九二九—三〇年に於ては尙ほ七三%を保つてゐる。以上日米兩國の増進は英國の對印輸出を犠牲にした許りでなく、同時に獨逸並に中立國の貿易に代つたものが多かつたのである。左表に就て見ても、獨逸は戰前平均六四%を占めて居るが戰時平均は〇七%に激減し、オーストリアも戰前の二二%より戰時の〇二%に、ベルギーも戰前の一・九%より、三%と何れも減少して居るのである。之等の諸國の對印輸出は戰後今日に至るまで何れも多少づゝの恢復を示して居るが、特に顯著なるものは獨逸の増加であつて、一九二〇—二一年以來その對印貿易は絶對的にも相對的にも健實なる増加を示し、一九二六—二七年度には却つて戰前を凌駕するに至つたのである。前表に示す如く、瓜哇よりの輸入は極めて重要なる地位を占めて居るが、之は主として砂糖の輸入である。かくて大戰後特にドーズ案實施後の經濟復興によつてヨーロッパ諸國の對印輸出は漸次に増加して、再び戰前の地位を占むるに至つて日米兩國の占むる割合は次第に減少して來たのである。即ちフランスの如きも一九二六—二七年に於て既に戰前の地位を回復して一五%を示し、其後漸次増加して最近は一・九%を占め、ベルギーも戰時中の三%より一九二七

—二八年には三%を占め、今日尙ほ二・八%を前後し、オランダも戰時中の六%より漸増して一九二六—二七年には二%を示し、近年にても一・八%を下らない状態である。イタリーの戰前の地位は一%であつたが今日にては二・八%を占めて居るのである。即ちこれらの關係から推論する時は、對印貿易に於ける英國の輸出の減少は主として日米兩國の進出と、ヨーロッパ諸國特にドイツの輸出力の恢復によるものと見られるのであるが、試みに英帝國以外の對印輸出割合を表示すると左の如し。

第七表 英帝國と諸列國の對印輸出割合

	戰前平均	戰時平均	戰後平均	一九二四	一九二五	一九二六	一九二七	一九二八	一九二九
英 帝 國	六九・七	六五・四	六五・二	二二・五	二二・六	二二・七	二二・八	二二・九	三〇・〇
諸外國合計	三〇・三	三四・六	三四・八	三七・八	四〇・九	四五・一	四五・四	四五・九	四八・三

Review of the Trade of India for Recent Years 124 no.

これによれば英帝國の占めた印度輸入の割合は戰前五ヶ年平均の六九・五%より一九二九年には五一・七%に減じたのに對し、英國以外の諸列國は同期間に於て三〇・三%より四八・三%に増加して居るのである。印度の輸入高を金額にて比較

一四
すると、英帝國は一九二五年度の一億一千八百萬ポンドより一九三二年度の四千二百萬ポンドに減少したに對し、諸列國は同期間に七千一百萬ポンドより五千二百萬ポンドに減少したに過ぎないのである。

對印貿易に於ける英國衰頹の原因

以上にてほゞ明らかになつた如く、印度市場に於ける英國の勢力は漸次に失墜し、日、米、獨の對印輸出増加が漸次に代つたのであるが、然らば何故に英國の支配的地位は失はれたのであるか、この點に關して以下説明しやうと思ふ。

英國の對印貿易は東印度會社以來の歴史的背景もあり、政治的管理と、商工業及び金融上に有する特殊の便宜を加へて、殆んど壓倒的の勢力を扶植して居たのである。印度政府の用品、軍隊用品等もすべて英本國より供給されしことまた謂ふまでもない。かくて、英國は對印貿易に關しては、自然に絶對的支配權を確立し、十九世紀末に於て、列國の商權が對印發展を試みんとした時には、印度に於ける貿易は他の銀行、商館、運輸、及び各種の製造工業と共に、すべて英國の資本と人によつて

經營され、容易に他國の窺視を許さなかつたのである。特に興味ある事は、印度にて英國以外の貿易に對して設定された差別的待遇は何れも一八六〇年末までに撤廢され、十九世紀後半に於ける印度は極めて自由なる市場であつたのである。當時英國の對印貿易は何等の差別的待遇、關稅、其他の保護を必要としないまでに發達し、印度の企業は二三の例外はあるが殆んど全部英國の資本によつて經營されて居たのである。即ち英國の對印貿易は明らかに決定的、且つ率先的の利益を有せしのみならず、英國の重要産業たる綿製品は印度市場の開拓と相まつて今日の隆昌を來したのであるが、一面に於ては印度に於ける産業の發達により、他面、英國以外の諸國に於ける原料、生産設備及び技術の進歩は、漸次に英國の優越性を減退さして來たのである。之は明らかに大戰前に於ける一般的大勢と見られるのであるが、この大勢は大戰の影響をうけて一層根本的の變革をもたしたのである。而して一九一四—一九二〇年間に於て自然に醸生されたる印度の經濟的發展と政治的動搖と相まつて益々この傾向を著しくしたのである。前記カーネギー平和財團の研究によると、之を左の諸項に要約してゐる。

第一、印度の工業化。印度の工業化は既に大戦前よりの宿望であり、織物工業などは大戦前に於て相當の發達を遂げてゐたのであるが一九一七年に組織された印度軍需局は後に至りて一層國內産業の發達を指導し、戦時に於ける印度資源の動員は少からず、印度國民の産業的自覺を促進したのである。

第二、保護政策。かくして印度にては一九二三年より重要産業に對して差別的保護政策を採用するに至つたが、これは疑ひもなく印度政府が多年固守してゐた自由貿易政策の放棄を意味するものであつて、同年度に創設された關稅局 Tariff Boardは保護政策實行への第一歩を進めたものである。戦前、印度に於ける一般關稅率は五%であつて、鐵、鋼、機械、鐵道材料等に就ては五%以下又は無税であつたが大戦に際して一般稅率は七五%に引上げられ、一九二一年には更に一般稅率は一%となり、贅澤品には二〇%の特別稅が賦課され、翌年更に前者は一五%、後者は三〇%となり、鐵及鋼にも新たに二五%乃至一〇%を賦課したがかくして、印度人が要望して止まない印度の關稅自主は、漸くその力を發揮し、一九二四年には、印度立法院は鋼鐵工業の保護條例を通過すると共に從價一五%乃至三〇%の新稅を

賦課したのである。綿業に對しては一九三〇年三月に、綿布及綿糸に對し、一般稅率一%を從價一五%に、生綿布一封度に對し最低三安半を課し、英國品以外の綿布には五%の附加稅を適用したが、之は、日本よりの輸入に對し、特殊の差別稅を適用せる初發と見らるゝものである。

第三、カダール運動。印度人の要望する保護政策の氣運が更に一轉して印度國民黨の國家主義と抱合し、カダール運動に更に拍車を加へたことは大に注目すべき現象であつた。カダール運動は舊時代の手工的糸車及織機によつて機械製の綿糸布を排斥せんとするもので、之は爾來、今日に至るまで、印度の對英政策に大なる暗影を投じてゐる。即ち一九二一年に於ける非協同團運動 (Non-cooperation Party) 一九二三年九月に於ける印度國民會議の英國品不買計畫、一九二八年末に發生せる英貨排斥などはその主要なるものである。之等の不買運動の影響は元より正確には分らないし、また不買同盟は英國品と同時に一般外國製品をも排斥した場合もあるが、ともかく英國の輸出品特に最大輸出品たる綿糸布の對印輸出が少からざる打撃を蒙つたことは明らかである。進んで一九三〇年以降に於ける外國織

布不買運動は一層効果的となり、恰かも上海に於ける日貨排斥の如く、一般外國織布を賣る商店は絶えず監視を受け、時には破壊された事もあり、商品は多く破棄せられたのである。英國品と共に日本製の綿布もまた嚴重に排斥せられたこと謂ふまでもないが、常に之等の運動を指導せる印度織物商組合 Native piece goods merchants association は「組合員は三ヶ月間、如何なる種類の綿糸布と雖も外國に注文すべからず云々」と決議してゐる、即ち左表に示したる輸入の減退は明らかに不買同盟の影響を語つてゐる。

第八表 一九二九及び一九三〇年印度の綿織物輸入數量 (單位百萬ヤード)

自一月至十一月		一九二九年	一九三〇年
生地	布總計	八四五	五三六
英國	より	四八九	二八八
日本	より	三三九	二四五
其他	より	一七	三
晒綿	布總計	四五一	三三六
英國	より	四二二	二九四
其他	より	二九	四二
染綿	布總計	四四五	三二〇

英國より 二六九
日本より 一二九
其他より 四六
本表は Indian Trade Journal 一九三一年一月八日及一九三〇年一月九日による。

斯くの如くして印度の國民運動は益々印度商人の間に浸潤し、印度獨立の要望と同時に、産業印度としての自覺は日を追ふて外國製品排斥の熱を高めて來たのである。加之、印度の灌漑道路建設、運河開鑿等の事業は主として米國風の機械と經驗とを輸入したる當然の結果として、こゝにも英國製品の對印輸出を著しく減退させたのである。自動車、タイプライター事務用器等も多くは米國によつて新販路を開拓されたものと見られる。

更に英國の勢力を失墜させた原因としては、印度の直接輸出入が年と共に増大し、金融市場並び積替中心地であつたロンドンの重要性が著しく減殺された事や列國の對印投資の増加などが數へられるのである。特に米國の對印投資は近年益々増加し、同時に、重要産業の支店或は工場にして印度に設立されるものが非常に多くなつて來たのである。現に米國の印度に於ける販賣は殆んど全部直接取

引であり、米國は之によつて異常の成功を収めてゐるが、ドイツの如きも既に對印輸出と原料輸入を目的として二百餘の製造業者と糾合し、有力なる輸出貿易會社 Indo-German Products Corporation, The Export-Dienst (India) Ltd. を創立し、印度人並に印度人の機關と協同して、しきりに對印輸出の發展を試みてゐる。

我が對印輸出概観

我が對印輸出は昭和六年に於て一億一千三十六萬七千餘圓にして、之を昭和四年の一億九千八百萬圓に比すると著しい減退であるが、然かも列國の對印輸出の減少率に比するときは却つて好成績を擧げてゐるのである。最近四ヶ年間の品別輸出金額は左表の通りである。

第九表 昭和四一六年本邦對印輸出品別價額 (單位圓)

品名	昭和四年		昭和五年		昭和六年	
	金額	品數	金額	品數	金額	品數
植物性脂肪油	六二、三五八		六四、一八三		四五、三五五	
薄荷油	六七、七九〇		三五、四七七		二四、五〇四	
魚油及鯨油	一三八、一九四		八九、二一〇		一八、六五五	
石鹼	四九、二三四		四四、二二一		三〇、八一八	
樟腦	一、七四八、二八七		六八五、二一四		六一六、八〇〇	
薄荷腦	四三三、一一三		二六〇、二四七		三一八、八三〇	
マツチ	一一二、五四六		一一、三三五		四、一四二	
綿糸	一三、四四八、三一八		六、五七五、九八六		五、五九二、二三四	
綿織物	一〇九、一三八、九九七		六一、二一六、二五四		四九、八六六、〇一九	
毛織物	三七五、五〇一		一八八、〇四六		六三、三八五	
絹織物及人造絹織物	二四、七一七、〇二二		一六、七八一、五一三		二一、五二四、六一七	
絹ブランケット	四六六、一九三		四一〇、三六一		二一二、四二七	
綿タオル	一、〇三三、五一七		七七七、一二〇		四三六、一九九	
綿製手巾	六三六、五五四		四一二、五六八		二六二、八二二	
メリヤス製品	九、九二八、七二一		七、九四八、九一九		三、九〇一、四三六	
帽子	六二八、五四一		五〇六、八七九		四九七、四四四	
鈕釦	五四五、五七二		四一二、九五三		三一九、三七四	
身邊裝飾用品	三、〇五四、一三三		一、六九五、七九五		一、一四二、六六六	
紙類	八八一、七三四		九二五、三八七		九八三、四五七	
セメント	四二九、四七四		七四六、三三一		一、〇三八、九一五	
陶磁器	二、五五八、九九〇		一、八六七、三六七		一、三九一、五一一	
ガラス同製品	四、〇八五、七〇一		二、八八八、〇〇七		二、二三九、〇一六	

鐵	眞鐵	鐵製	機械及同部分品	木	洋	洋燈及同部分品	刷	玩	其	合	大藏省外國貿易月表による
五、五二三	二、五八五	二、三〇四	五八一、八九六	三、三二九	五三、一六〇	六七、四五二	五六〇、四八九	一、四一三	一一、九七四	一九八、〇五六	大藏省外國貿易月表による
一四、六七四	一、八五八	一、七一二	七二八、六八三	二、五一八	二八、六五三	九九、五七九	四八一、四八五	一、〇六九	一五、五六二	一一九、二六二	
二一、九五六	一、一五〇	一、七六二	四七〇、五二五	一、七六二	四五、一〇九	六一、九五七	三〇九、〇四九	七一、三四八	一一、八九一	一一〇、三六七	
											計
										一九八、〇五六	
										一九八、〇五六	
										一九八、〇五六	

即ち輸出品の内、百萬圓以上に上るものは綿糸、綿織物、絹織物及人造絹織物、メリヤス製品、身邊裝飾用品、セメント、陶磁器、ガラス、及同製品、眞鍮、鐵製品、木材であり而して綿織糸、綿織物、絹織物及人造絹織物及メリヤス製品の四品を合計する時はその輸出額實に八千八百八十萬四千餘圓に上るのであるから、我が對印輸出の大部分を占むるものは之等の纖維製造品であり、従つて印度よりの輸入總額の一億三千三百萬圓中、一億一千三百萬圓を占むる實綿及繰綿と併せ考ふる時は、日印貿易

の特色を自ら窺知し得るであらう。

戦前の一九一三年に於ける我が對印重要輸出品は綿織物及メリヤス製品の二點のみに過ぎず、これすら一ヶ年の輸出高は孰れも僅かに一千萬圓を出でない状態にあつたのであるが、一九二〇年に至ると新たに綿糸、綿織物並にマツチの輸出が孰れも千萬圓を超過し、我が對印貿易の全盛期をもたらししたのである。戦後、英國並にヨーロッパ大陸の輸出力を恢復するに及んで、我が對印輸出は少からぬ影響を免れなかつたが、然かも尙ほ大戰中に扶植した商權を維持して今日に至つたのである。

この間に於て我が輸出品の内容には著しい變化が起り、一時的の商品は漸次に整理され、恒久的商品の維持進展を見たのであるが、特に顯著なる變化としては第一、マツチ輸出の殆んど全滅した事である。マツチは一九二一年に於ては印度の全輸入額一千七百五十七萬留比中、我國は一千六百九十萬留比(九割一分餘)を占めて居たが、一九二七年には僅かに二十四萬留比となり、今日にては殆んどその跡を絶つてゐる。これは主として一九二四年の關稅改正の結果と見られるが當時印

度にては關稅收入増加の目的にて高率なる輸入税を賦課したのであつた。文房具品に屬する石盤も、以前は我國より相應に輸出されてゐたが、之はドイツ品の爲に壓倒され、パリカン、ランプの類は米國製品に抗し得ずして何れもその影をひそめて了つたのである。印度内地に發達せる各種の工業も自然我が輸出品の上に影響し、現に我が綿製品の如き、單にランカシャー製品と競争するのみならず、後段に詳説する如く、印度の製品と激しく競争し居る状態であり、其他の印度に於ける瑛瑯鐵器、ガラス製品、陶磁器、メリヤス製品なども、近來著しくその技術が發達し、生産額を増加しつつあるから、將來は我が輸出の上に少からぬ影響を及ぼすであらうと思ふ。印度人の生活程度は至つて低く、その需要するものは綿製品を始め一般に低級安價なるものであり、自然印度内地の製品を以てして容易に輸入品に替り得るのであるから、我が對印輸出はこの點より見ても、決して樂觀を許さないのである。

對印綿製品の輸出大勢

綿製品は我が對印輸出品中の大宗である。即ち昭和六年度の我が對印輸出は前表に示す如く總額一億一千三十六萬圓に達したが、その内綿糸五百五十萬圓、綿織物四千九百八十萬圓の多額に上つてゐるのである。然かも近年の如く我が綿製品が支那市場より絶えず排斥せられて居る關係から見ても、綿製品の對印輸出は向後一層の重要性を加へることと思ふ。

謂ふまでもなく我が紡績事業は最も重要な産業の一であり、その消長は國內の景氣進では國際經濟の上にも重大なる關係が存するのであるから、綿製品の對印輸出に關しては益々進展の途を講ずる必要があるのであるが、周知の通り、英國はランカシャー製品保護を目的として、我が對印綿製品に對して殆んど禁止的の差別的待遇を加へんとしてゐる。綿製品の將來に對して一層の關心を要する所以である。

一九三一年に舉行した人口調査によると、印度人の概數は三億五千萬人、而してその八七・七%即ち三億萬人以上は生活程度の非常に低い農民である。彼等は多く熱帯に生活して居る必要から、古來より地質の堅牢にして洗濯にたえ得る衣服を要求し、自然綿布の必要は非常に多く、現に一ヶ年の輸入綿布は六億萬留比内外に達してゐる。ガンディー一派がしきりに外國産綿製品の排斥を唱へてゐるに拘らず、その輸入は年々増加する傾向にあり、常に印度輸入總額の二割を下らないのである。尤も年によつてその輸入額は著しく増減して居るが之は主として印度の農作物がモンスーンの影響によつて豊凶の差が甚しい事と、二、印度人は一般に収入が少なく、必需品たる綿布を購入するにしても決して容易でない爲である。萬一、彼等の収入が増加せず、綿製品のみ騰貴する如き事あらば、その需要は忽ちに減少するのが常となつてゐる。戦前に於ける綿布の需要は一ヶ年約四十八億ヤードであつたものが、戦時及び戦後五ヶ年を通じて一ヶ年約十億ヤードに減じたのも全く之が爲である。

印度は久しい間、英國綿製品の重要なる輸出市場であり、ランカシャー製品は多

年に亘つてその支配的地位を確保して居たのであつて、戦前一九一三年に於ける我が綿製品の如きは僅かに百三萬圓の輸出を見たに過ぎなかつたのである。其後我が内地に於ける紡績事業の發達するに従ひ、一九二〇年には六千七百萬圓、一九二九年間には實に一億九百十三萬八千圓の巨額に達したのである、かくて綿製品の輸出は我が對印輸出品中で最も重要な地位を占め、その輸出總額に對する割合も、一九二〇年度の三五%より、一九二九年の五三%に増加したのである。ガデル氏の『近世印度の産業發達史』によると、この間の情勢に關して、『戦前五ヶ年に於ける日本の對印綿製品の輸出は一ヶ年平均三百萬ヤードに過ぎなかつたが、戦時中は一ヶ年平均九千七百萬ヤードの増進を示した、世界大戦は疑ひもなく日本の紡績業に進展の機會を與へ、然かも日本は強く之を把み得たのであつて、一九一六・一七年頃より、その輸出は著しく増進して來たのである。然し、當時に於ける之等の輸出は全體より見ると、まだ至つて僅少であり、印度の紡績業にさしたる影響を與へなかつた許りでなく、ランカシャーよりの輸入が甚しく減退し居る際であつたから、特に意とするに足らなかつたのである。戦時中を通じて英國より

の輸入は益々減退し、一九一八・一九一九年に至つて最低記録を示したのであるが、日本よりの輸入は同年に於て反對に最高記録を示したのである。』(Industrial Evolution of India, D. R. Gadgil)云々と論じてゐる通り、我が綿製品の對印輸出に成功したのは全く大戦争以降の事と見てよいのである。之を英國側より見ると戦前一九一三年に於て、英國の綿布は總生産高の八五%乃至八七%を輸出したものが、一九二四年に至るも尚ほ戦時中の沈滞から脱し得ず、その輸出高は八三%と推定され、一九一三年に比して輸出は三五%の減退となつてゐる試みに一九二四年—三一年間に於ける英國綿織物の消長を全世界のそれと比較して見ると、近年に於ける英國斯業の衰退の如何に甚しきかを知るであらう。即ち左の如し。(前節参照)

第一〇表 英國の綿糸及び綿製品の製造及び輸出 (一九二四年を100として)

年	綿糸製造高		綿製品輸出高	
	全世界	英國	全世界	英國
一九二五年	一一七	一一三	一〇六	一〇〇
一九二六年	一二〇	九六	九八	八七
一九二七年	一二六	一〇六	一〇六	九三
一九二八年	一二二	九六	一〇三	八九

年	全世界	英國	全世界	英國
一九二九年	一二四	九四	一〇五	八四
一九三〇年	一〇七	六八	七九	五六
一九三一年	一〇八	六九	六三	四二

The Economist. 4.640による。

これによると全世界の綿製品は一九二五年以來、一九二九年間に著しい増加を示してゐるが、英國はやゝもすれば現存勢力を失墜する傾ひがあり、更に一九三〇—三一年に至つて驚ろくべき激減を示したのである。即ち同年次に於ては世界恐慌の影響をうけて英國の綿製品は製造高三十一億ヤードに、その輸出高は一九一三年に比して三五%に減少したのである。特に世界に於ける綿製品の消費高が一般に増加せるに際して、英國の綿業のみがかくの如く萎縮した事は一層注意すべき現象であるが、その主たる原因が海外に於ける競争關係に基くことは疑ひを容れないのである。左表は有力にこの間の推移を語つてゐる。

第一一表 英國の綿織物地方別輸出累年比較 (一九一三年を100として)

年	平均		百萬元		ヤード	
	一九〇九—一三年	一九二四年	一九二四年	二八年	一九二四年	二九年
印度 (ビルマを含む)	二、五〇八	六二	五八	五一	二九	一六

指數

支那及香港	五八七	五五	三五	三六	一二	一四
其他の極東	五七四	五八	六二	五六	二八	一七
中央及南部アメリカ	七九八	六三	五九	五八	四〇	二七
ヨーロッパ	三六二	一二二	九二	八三	七六	七〇
近東諸國	八二四	七四	四八	四二	三二	三〇
アフガニスタン	三一六	八八	一一四	九四	一〇一	五七
濠洲及ニューギニア	二一四	八六	八一	九二	七五	七〇
米國及カナダ	一四六	一四五	五七	四九	三五	二七
其他合計	六、四八二	七一	六一	五八	三八	二八
The Economist 4640 による。						

三〇

合計に於て一九二四年の七一%より一九三一年の二八%に減じて居るが、特に甚しく減衰したのは極東、近東及中、南部アメリカの市場であり、印度支那市場の如きも甚しい減少であるが、ヨーロッパ、アフリカ、濠洲及ニューギニアに對する減少率は割合に僅少である。而してかゝる減退は大戦直後にあつては、主として之等市場に於ける消費の減退により、一九二四—二九年間に至りては主として海外諸國との競争の結果に基くことは次表によつて明らかである。

第一二表 主要國の綿織物輸出累計比較 (價格を基準とす)

英 國	一九二四年	二八年	二九年	三〇年	三一年
日 本	五四・六%	四六・九%	四四・二%	四〇・〇%	三五・三%
日 本	一〇・八	一四・七	一七・五	一八・〇	二二・四
日 本	七・四	七・二	七・二	八・六	七・七
日 本	六・三	六・九	七・〇	六・八	七・九
日 本	五・九	六・二	六・二	六・二	七・〇
日 本	四・〇	五・〇	四・七	五・三	四・四
日 本	一・三	二・七	二・八	三・八	三・五
The Economist 4640 による。					

即ち英國以外の諸國は何れも多少づつの進展を示し、特に日本の發展は最も顯著なるものがある。英誌エコノミスト誌はこの間の消長に關して「戦前に於ける日本の勢力はさ程恐ろしきものでなかつたのであるが、日本は大戦に乗じて極東市場に確固たる地歩を占め、又近年に至りては更に中部、近東及アフリカにまで發展してゐる、かくて、世界の主要綿業國が何れもその生産力を増加し、輸出の促進を試みてゐるに際して、英國の綿業は殆んど大戦前に比して何等の増減を見なかつたのである。」と述べてゐる。

斯くの如くして、印度市場に於ける日英綿製品の角逐は日を追ふて激甚を加へて來たのであるが、如何にしても我が製品の輸出増進に對抗し得ず、その輸出は益々減少するに及んで、終に英印特惠關稅による關稅障壁を高めて我が綿製品の印度侵入を防ぎ、同時に、全印度の消費を總動員して、ランカシャー綿業を救はんとするに至つたのである。この間の情勢を一層明らかにする爲に、左に最近數ヶ年間に於ける印度の綿製品消費高並に日英兩國の對印綿布輸出高を比較すると左の通りである。

第一三表 印度綿布生産、輸入、消費高 (三月に終る一ヶ年) (單位百萬ヤード)

生産高	輸入合計	英國ヨリ		日本ヨリ		輸出	再輸出	消費高
		輸入	輸出	輸入	輸出			
一九二七—二八年	二、三五七	一、九七三	一、五四三	三二二	一六九	三四	四、一二七	
二八—二九年	一、八九三	一、九三七	一、四五六	三五七	一四九	二四	三、六五七	
二九—三〇年	二、四一九	一、九一九	一、二四八	五六二	一三三	二二	四、一八三	
三〇—三一年	二、五六一	八九〇	五二二	三二一	九八	一七	三、三三六	
三一—三二年	二、九四八	八六〇	三八五	四一四	一〇四	一五	三、六八九	

大日本紡績聯合會による。

即ち最近二ヶ年間に於ける印度の綿製品消費高が前年に比して著しく減じ居

るに拘らず日本よりの輸出は却つて増加の趨勢にあり之を種類別に見ると、生地綿布、加工綿布の減少せるに對して、昨年於ける晒綿布の輸出は前年に比して殆ど倍加してゐること左表の通りである。

第一四表 對印本邦綿布輸出種類別表

数量	生地綿布		晒綿布		加工綿布	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格
一九二九年	四三四、四六七	七五、六四四	一六、三一	三、三八〇	一二九、八二六	二九、九二八
一九三〇年	二九四、四五四	四一、三六五	二八、四一四	四、四二六	八〇、九六五	一五、三九五
一九三一年	二四六、〇三六	二七、九五六	六七、五〇三	八、五五九	九〇、三九五	一三、三〇二
一九三二年六月まで	一三八、四七八	一四、四八一	六八、八三八	七、二八〇	八六、四三六	一二、〇八〇
同上	一九〇、八九七	三四、〇九四	七、五九五	一、五九九	六七、五一	一六、〇一五
一九三〇—一六	一八八、一一一	二八、〇八一	一五、一九七	二、六〇七	五二、二五七	一〇、五〇一
一九三一—一六	一二二、四九八	一四、七七二	二七、一〇九	三、六九六	四〇、一二〇	六、三〇七
一九三二—一六	一三八、四七八	一四、四八一	六八、八三八	七、二八〇	八六、四三六	一二、〇八〇

大日本紡績聯合會調査による。

イ、生地綿布

我が生地綿布の對印輸出に就て見ると、一九二八年に於ては我國は遙かに英國に及ばなかつたのであるが、一九三〇年に至るや、反對に英國を凌駕し一九三一年の如きは英國の九百五十萬留比に比し我國よりの輸出は實に二千八百萬留比に達したのである。最近四ヶ年間の増減を表示すると左の如し。

第一五表 對印本邦生地綿布輸出 (單位留比)

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
英本國及英領	一三七、八〇九、四八〇	一一七、五九八、七〇八	二八、一二八、三八五	九、五五三、九七八
日本	六〇、一九八、九一六	八九、一二五、九四七	三九、八二二、一四一	二八、九〇〇、二一七
其他	三、九〇七、七三三	二、五三四、四一八	七、一八、四一〇	七八九、八五〇
合計	二〇一、九一六、一二九	二〇九、二五八、〇七三	六八、六六八、八三六	三九九、二四四、〇四五

India Seaborne Trade による。

其他の諸國の中では支那(六三四、三〇六留比)米國(一三九、六一八留比)が主なるものであるが、殆んど謂ふに足らない。米國よりの輸入千八百萬ヤードの内、千五百萬ヤードはフェンツ(端物)である。即ち印度市場に於ける我が生地綿布は完全にランカシャー製品を壓倒せんとする勢にあり、之に對してランカシャーにては主として細糸物と晒綿布に力を注いでゐるから、この點から見れば、我が生地綿布の前

途は左程の憂慮を要しないやうであるが、たゞ最も多く印度の綿業保護主義の犠牲となるものが、この生地綿布であることは疑ひない事である。印度の需要する綿布は民度の向上すると共に自然に晒物或は加工品に推移するは明らかであるが、しかし多數の印度人は恐らく將來とても低級なる生活に終始するものと思はれるから關稅の壓迫さへ緩和する事が出来るならば我が生地綿布の輸出は益々増加して止まないであらうと思ふ。生地綿布生産に於ける我國の世界的地位は左表の通りであつて、英國の衰退に反してこゝにも我國の躍進を見ることが出来るのである。

第一六表 英、日、印の生地綿布輸出高比較 (全世界の輸出を一〇〇として)

	全世界	英國	日本	印度	米國及其他の ヨーロッパ各國
一九二八年	一〇〇・〇	四五・二	二五・三	・七	二八・八
一九二九年	一〇〇・〇	四一・七	三一・九	・八	二五・五
一九三〇年	一〇〇・〇	三三・二	三五・九	・七	三〇・二
一九三一年	一〇〇・〇	二三・三	三九・〇	一・〇	三六・七
一九三二年	一〇〇・〇	二八・五	三六・二	・九	三四・三

内地産の輸出のみにして再輸出を含まない、一九三二年は上半期。The Statist 2349 による。

ロ、晒及び加工綿布

晒綿布の對印輸出では英國が群を抜き、一九三一年度の輸入總計五千三百二十五萬留比の中、英國は四千萬留比以上を占めて居るが、こゝにもまた英國の減退と日本の進出を見ることが出来る、即ち左表に示す通り、我國の輸出は一九二八年以來、累年顯著なる増加を示して居るに反し、英國よりの輸出は一九二八年度の一億四千二百萬留比より一九三一年度の僅か四千萬留比に減少したのであつて、この點が最も多く英國綿業者の苦惱とする處である。色綿布に就ても大體晒木綿と同一の趨勢を見る、即ち英國製は一九二八年度の一億一千九百萬留比から一九三一年度の二千八百萬留比に激減せるに對し、我國よりの輸出は同年次に於て二百七十萬留比より一千六百二十萬留比に増進して居るのである。オランダ、イタリヤ等よりの輸出も一樣に減退せる際、獨り我國の輸出のみが増進を續けて居るのであつて、之また英國綿業者の注視を惹く所以である。

色綿布は染色、捺染は元より綿布の幅や長さ或はデザインの相違、仕上げの不良色素の淺薄にして褪色し易き等、更に染色による地質の汚損又は脆弱等、加工上の不注意、不手際に基因する苦情が從來は決して少くなかつたやうであるが（印度經濟事情）之等の缺點は近來大分に除かれ、技術上より見るも、優に英國品と角逐し得る進歩を示して來たのである。今日までの情勢より見て、晒色綿布等に於て需要の増進を疑はないのであるが、我が輸出の増進するに従つて、印度政府の關稅政策は我國に對して一層不利なるべきは容易に想像されるのである。

第一七表 對印晒綿布輸出國別（單位留比）

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
英本國及英領	一四二、三三六、三六四	一二〇、二五八、三六二	五二、二九三、六三四	四〇、二〇二、〇〇八
オランダ				一、〇五二、六八三
スウイス				一、七〇九、三一七
日本	一、五三五、九三七	三、三二四、七七七	五、六九六、七六九	九、三四三、六三八
其他	九、四七八、八六四	九、一七二、〇七二	四、六六〇、九九一	九、四九三、三六二
合計	一五三、三五一、一六五	一三二、七五五、二一一	六二、〇五一、三九四	五三、二五七、〇〇八

第一八表 對印色綿布輸出國別（單位留比）

英本國及英領	一一九、九三〇、四八二	九五、〇四四、四五五	四四、七五五、八三一	二八、五三五、九四九
オランダ	五、五四六、九一五	六、九八〇、三五四	三、五〇八、七四四	一、〇一〇、七五八

イタリ	一二、二三九、〇九一	八、二五一、六五三	二、八一四、五七一	二、五九八、四〇八
日本	二、七一一、一二五	三四、四七七、五二五	一四、三六〇、八七九	一六、二六六、七〇四
其他	三五、七七五、六四五	四一、一八九、八二二	二、七四四、四三八	二、一一六、五一八
合計	一七三、四八二、一三三	一五三、四六六、二九四	六八、一八四、四六三	五〇、五二八、三三七

India Seabome Trade による。

晒及び加工綿布の輸出に於ける我國の世界的地位は漸次に向上し、特に晒綿布に於て顯著なるものがある。兩者とも英國が尙ほ壓倒的勢力を有して居るが、晒綿布の輸出は著しく減退し、加工綿布に於てやゝ増進したに過ぎないのである。即ち左の如し。

第一九表 日英印の晒及び加工綿布輸出高比較 (全世界の輸出を一〇〇として)

晒綿布	全世界	英國	日本	印度	米國及び他のヨーロッパ各國
一九二八年	一〇〇・〇	六四・五	五・四	一・一	三〇・一
一九二九年	一〇〇・〇	六三・〇	五・九	一・一	三一・〇
一九三〇年	一〇〇・〇	五六・九	八・四	一・一	三四・五
一九三一年	一〇〇・〇	四七・九	一二・四	一・一	三九・六
一九三二年	一〇〇・〇	五四・一	一三・三	一・一	三二・六

加工綿布

一九二八年	一〇〇・〇	四一・九	一四・六	二・八	四〇・七
一九二九年	一〇〇・〇	三八・九	一六・八	二・七	四一・五
一九三〇年	一〇〇・〇	三六・七	一五・九	二・七	四四・六
一九三一年	一〇〇・〇	三三・七	一七・二	三・二	四五・八
一九三二年	一〇〇・〇	四三・三	一五・六	三・一	三七・九

内地産の輸出のみにして再輸出を含まず、一九三二年は上半期、The Statist 28349 による。

ハ、綿糸の輸出

印度は我が綿糸にとりても甚だ重要な市場であり、現に年額八百萬留比以上の輸出を試みて居るが、印度に於ける綿糸事業の發達並にその保護政策を考慮する時は、綿糸輸出の前途は決して樂觀を許さないものがある。特に印度に於ける斯業の進歩は近來頗る顯著なるものあり、従來は主として一番手より二〇番手の太物を製造して居たのであるが、近時は一層細番手並に薄手綿布を生産するやうになつて來た、ビヤース氏の「印度紡績工業」によると、氏が一九三〇年一月乃至三月に訪問した數十の工場にては殆んど全部ウガンダ綿を使用し、大體は四十番手の特に柔軟なる經糸を作つてゐるらしく、印度は必ず細番手糸並に薄手綿布に一大

進出をなすであらう」と述べて居る。The Cotton Industry of India, by Pearse. 而して同氏は最近に於ける印度の紡績事業につき「新たに起つた東洋の製造中心地(日本及び支那も含みて)原綿生産地並に綿布の消費市場に近接せる地理上の利益を享有せる外、ランカシャーのそれに比すれば近代的設備によりて一層勞銀を低下せしめ以て英品を駆逐するに至るであらうと論じて居るが印度の紡績業は單に英國綿糸を駆逐するに止まらず、我が輸出糸の進出をも漸次に阻止せんとする勢にある。次表は日印並に支那の鍾數比較であるが、一九三一年末現在我國の七百三十一萬本に對して印度は實に九百十二萬本を數へるのであつて、疑ひもなく世界有数の綿糸國となつてゐるのである。

第二〇表 日支印紡績鍾數比較

計 印 支 日	總鍾數					
	一九一四年	一九三〇年	一九三一年	ミュール	リング	建設中の鍾數
度 那 本	二四、四、五四	六、八七、〇〇〇	七、三三、〇〇〇	四、〇〇〇	七、三九、〇〇〇	六、〇〇〇
計	三〇〇、〇〇〇	三、六九、〇〇〇	四、〇〇、〇〇〇	—	四、〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇
	六、三九七、四三三	八、八〇七、〇〇〇	九、三三三、〇〇〇	八七、〇〇〇	八、三二八、〇〇〇	一八、〇〇〇
	九、二一、六六六	一、六三三、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	八六〇、〇〇〇	一、九六三、〇〇〇	一、四一、〇〇〇

一九三一年は七月末現在、ミュール、リング、建設中の鍾數も同上現在、本表は The Cotton Industry of India, by Pearse 並に大日本紡績聯合會編綿糸紡績事情参考書にて作る。

現在、印度に綿糸を輸出する國は英國、支那、日本の順位となつて居り、其他スウイス、イタリより少量の輸出はあるが殆んど論ずるに足らない。最近數年間に於ける輸出國別を表記すると左の通りである。

第二一表 對印綿糸輸出國別 (單位留比)

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
英本國及英領	三五、六一〇、三八二	二九、五九一、四七四	一一、六五六、七二八	一一、一八一、九一八
スウイス	四九六、九五二	九七五、〇四〇	九三、二六二	五五、一九二
イタリ	一、〇二四、六三三	一、六五六、五二二	七六、七四八	一一二、六九八
支那 (香港を含む)	一一、七八九、八三〇	一一、〇八一、〇〇三	九、五八四、四五七	九、二〇一、三〇一
日本	一一、三七一、六九二	一六、三七七、九八五	八、三五六、三八六	八、二八二、三七七
其他	五八五、四七四	三〇三、七九〇	六九、四二五	四四、七四五
合計	六二、八七八、九六二	五九、九八五、七一五	三〇、八三七、〇〇五	二九、八八八、二三一

India Seabome Trade によろ。

右の表中、支那の分はその大半は上海に於ける邦人の經營になる紡績工場の製品である。内地よりの輸出は一九二九年度には實に一千六百三十七萬留比以上に

達したのであるが、一九三〇年以後は殆んど半減して了つたのである。かつて、印度輸入綿糸の五四%を供給した我國としてその激減に驚かざるを得ないものがある。即ち遡つて之を見ると、一九二五—二六年に於て我國は英國よりの對印綿糸輸出を戦前の二分の一以下に減退せしめ、その占むる割合は一九一三—一四年の約百萬封度——印度總輸入量の約二%より一九二五—二六年には六五%に増加してゐる。一方、英國の占むる割合は一九一三—一四年度の總輸入量に對する八六%より一九二五—二六年の三一%に減少してゐる。而して我國よりの輸出は一九二五—二六年以後に於て著しい減少を示し、一九二八—二九年には終に一七・四%に激減し、英國は反對に、同年度に於て五二・八%にまで恢復したのである。即ち我が輸出の減退は主として英國の回復と支那綿糸の進出によるのである。支那よりの輸出は一九二五年までは皆無であつたものが、一九二八—二九年には總輸入量に對して二六・一%を占めてゐるのである。尤も支那綿糸の大部分は前述の通り日本人によつて製造されたものである。

次に印度にて輸入する綿糸の種類を見るに一九三一年中の輸入總計三千二百

三十萬ポンドの中、その過半は生單糸であつてその數量千七百三十萬ポンドに上り、番手より見ると三十以上四十番手が千三百萬ポンドに達し、之は從來主として支那が獨占して居て、我國からの輸出は僅か四十萬ポンドに過ぎない、四十番手以上の細糸は大部分英國からの輸入にかゝり、一九三一年の輸入は三百七十萬ポンドである。生撚糸は同年度に三百四十萬封度を輸入したが、その輸出國別は英國百萬封度、支那二百萬封度、日本三十萬封度であり、支那は前年に比し二倍に増加し日本は八十萬封度を減少してゐる。晒綿糸の輸入は同年度に三百六十萬封度に達したが、内、英國は三百二十萬封度で前年に比し五十萬封度を減じ、我國は四十四萬五千封度を輸出し前年に比し一萬一千封度を増加した。

色糸は主としてランカシャーより輸入されてゐるが最近では印度内地品の進出によりて著しく輸入が減退した (Indian Textal Journal によつて)。

既に印度は九百十二萬五千本の錘數を有しその技術も近年著しく進歩を見せて居るから綿糸の輸出は將來益々困難を加へることと思ふのみならず、原綿、機械職工等の關係から、印度の紡績業は細番手の紡出には多少適しない事情がある。

自然向後は日英共に精細なる加工綿糸の進展を圖る事となるであらう、一九二六年以降に於ける我が輸出綿糸の實際を見ても、十六番手乃至三十番手のものは益々減少し、四十番手以上の細糸や、双子撚糸、染色糸、ガス糸等が漸次増加を示して居るのである。たゞ、今回のオッタワ會議に基く英印間の特惠國關係が我が對印綿糸に對して將來如何なる影響を及ぼすべきかは、最も考慮を要する點であらう。

之を大體より見ると、我が對印綿糸の輸出は恐らく年々減少するであらう、印度が所要の綿糸を自給する日はさう遠くあるまいとピヤース氏は觀察して後、「英國が印度或は他の諸國に輸出する紡績機械はすべて英國との競争品を製造するものであり、印度は現にランカシャーを恐れざる實力を備へてゐるから、ランカシャーの今後進むべき途は細番手の外にはあるまい」と述べてゐる。従つて、我が細番手の對印輸出は自後益々英國製品と競争する事となるであらう。

綿糸に對する關稅の壓迫は綿布と同様に益々甚しくなるであらう、今日までの重課は主として機械の改良、操業費の節減によつて補償されて來たが、之等の節約には自ら制限がある。我が紡績業は今回の増徴を如何にして償ふかと現に興味

ある問題とされて居るが、前記ピヤース氏は日印紡績業を比較して、日本の有利な點と、印度の不利な點を大要左の如く比較してゐる。こゝに擧げられた日本の利益は果して如何なる程度まで事實であるか、また將來何時までそれを持續し得べきかは容易に斷定し得ないが、我が紡績工が現在彼に比して遙かに優れて居ることは疑ふの餘地がないやうである。以下ピヤース氏の比較を要約すると、

一 印度人には種姓制度があり、教育を受けず、仕事に不注意であり、能率は低く織機二臺を擔當する者は至つて少ないか、日本人は印度人に比し三倍の仕事をして一人にて織機五臺半をうけもつ。印度の男工に比し、日本の女工は柔順で熱心である。ボンベイに於ける労働者一人當りの勞銀は日本に比し一割乃至一割五分低い、その生産高は日本に比し甚だ少ない、従つて綿糸一封度綿布一ヤード當りの勞働原價は印度に高く、日本に低い。

二 印度の工場にて二部交替制の行はれてゐるものは約十工場であり、他は十時間の一部交替制であるが、日本は八時間の二部交替制で、休日も印度より多い。

三 印度の紡績業は大部分マネーシング、エヂェント制を踏襲し、一人の專務取締

役の代りに數人の支配人よりなる一商社が存在して居るが日本紡績の六割乃至七割は三つの合同をなし、その各部にはそれ／＼専門家が居り、機械及商業知識を有する適當なる人物が働らいてゐる。

云々と述べてゐるが、かりに之等有利の點が我に存するにせよ、五割の關稅は恐らくは容易に補ひ得ないであらう。かくて、日、英、印の三國關係に就て見るに、日、英はほゞ利害を均しくし、將來高級綿糸の進展に頼る外はないと思はれる。「印度に於ける中番手綿糸の生産増加は日本及特に在支日本紡績業者との有勢なる競争と相まつて英國の發展を防止するであらうが、然かも高級綿糸の需要の増加する限り英國は依然印度市場に於けるその地位を維持し更に之を向上せしめつゝさへある」(前掲印度貿易に於ける國際間の競争)から、我が對印輸出綿糸の進路も、之によつてほゞ測定し得るであらう。

昭和七年度の對印輸出綿製品の狀況

昭和七年一月以降の我が綿糸布の輸出は爲替相場の變動に原因して殆んど空前の増加を示して居る。その増進は大要次表の通りであるが、之によつて見ると一月乃至九月間の輸出累計は前年同期に比すると實に四四・八%の増加となつてゐる、然かも本年一月以降の綿糸生産高は前年同期に比して一〇・九%の増加に過ぎないから綿布の輸出は遙かに綿糸の生産高を凌駕して居る。

第二二表 綿織物輸出高(一月以降九月累計、單位千萬ヤード)

昭和	前年比較増減(△)率
四年	一、三七〇、四四一
五年	△ 一三・七%
六年	△ 一七・三%
七年	四四・九%

第二三表 綿糸輸出高(一月以降九月累計、單位捆)

昭和	前年對比増減(△)率
四年	二、〇三四、一二六
五年	△ 五・三%
六年	△ 一・一%
七年	一一・一%

第二四表 綿織物輸出高(原糸換算)の生産高に對する割合

昭和四年(一月乃至九月)	四二・八%	昭和六年(一月乃至九月)	三七・二%
同五年(〃)	四四・四	同七年(〃)	四八・五

誠に顯著なる増進であるが、斯くの如き記録的躍進は全く爲替低落の結果と謂はざるを得ないのである。而して綿糸布輸出増加を輸出地別に見ると英領印度に對する輸出が最も著しく、其他蘭領印度、海峽殖民地、埃及等共に相應の増進を示し、獨り支那への輸出は時局の影響を受けて著しく減退した。即ち左表の如し。

第二五表 昭和七年一月以降九月本邦綿織物輸出主要國別(單位千萬ヤード)

	昭和五年 一月—九月		昭和六年 一月—九月		昭和七年 一月—九月	
	輸出高	割合%	輸出高	割合%	輸出高	割合%
支那	三五二、〇一一	二九・八	二二七、八〇九	二〇・五	一四七、九八五	一〇・四
關東洲	三九、二〇九	三・三	二八、四七二	二・五	七一、九八四	五・一
英領印度	三一〇、八〇七	二六・三	二八九、八三四	二六・一	四八四、二〇七	三四・一
海峽植民地	三一、五六八	二・七	三五、八五五	三・二	五一、六五五	三・七
蘭領印度	一三二、二一一	一一・二	一四九、二四七	一三・四	二二八、二六〇	一六・一
埃及	七五、九一九	六・四	八〇、八二四	七・三	一二四、三三六	八・七

大日本紡績聯合會の調査による。

然かもその間に於ける英國綿製品の對印輸出は一九三一年一月以降九月の三

二〇百萬平方ヤード(總輸出に對し二六・七%)より一九三二年一月以降九月の四六五百萬平方ヤード(總輸出に對し二七・三%)に増加してゐるのであるから、印度市場に於ける我が綿製品は殆んどランカシャー製品の増減に頓着なく未曾有の發展を試みたのである。

爲替低落による好影響は果して無制限に繼續増進すべきかに就ては元より然りと斷言し得ないものがある。即ち印度に於ける關稅増徴は、ランカシャー製品の保護と謂はんよりは却つて爲替安による我が綿製品の輸出を防止せんとするものであるから、向後尙爲替の低落がつゞき、綿製品の輸出が増進して止まない時は、今日以上の禁止的關稅の増徴さるる事は容易に想到さるゝ處である。現に九月以降減退の跡を示して居る點から考へる時は、爲替安に基く我が輸出の増加も恐らくは今日以上を豫期し得ないではあるまいか、少なくとも爲替の低落を唯一の武器とする對印綿糸布の輸出増加は、關稅の高度化を促進して長く不利益を甘受しなければならぬ危険をさへ伴ふものと思はれるのである。エス・エル・ポース氏は日印貿易の將來に論及して「印度は保護關稅其他の方法によつて日本品の

輸入を防止せんとして居るから綿製品の輸入は必ず減退するであらう、日本の他の重要輸出品たる絹は到底米國に對するが如く印度には輸出し得ない、即ち印度人は一般に貧乏である上に國內の養蠶業も相應に發達して居るから、綿絹製品とも今日以上の増進は望み得ないであらう、最近に於ける日本の對印發展は英國品以外に對する高率なる保護關稅の制定される以前であつて、且つ印度が激烈なる外國品排斥運動を開始する以前の事である、……即ち日本の對印輸出は漸次減退し、之に反して印度の對日輸出は必ず増加するに相違ない云々（日印協會々報五一號）と論じて居る、吾人は必ずしもボース氏の説に左袒するものではないが、ボ氏の言は他山の石として大に翫味する値なしとしないのである。

以上列記した綿製品は我が對印輸出品中の大宗であり、英印當局並に當業者の最もその對策に腐心し居る處である。而して英印兩國の當業者は久しき間、日本綿製品の對印進出を以て不公正なる手段並に策略の結果であるとなし、その理由として、日本は國際勞働條約中の工場勞働時間の規定を遵守せず、且つ爲替の人爲

的作用、或は政府の獎勵補助金による外國航路運賃の輕減、諸銀行の與ふる金融上の利便、ダンピング等を擧げてゐるが、日本綿製品の顯著なる對印進出はかゝる原因によるに非ずしてむしろ「生産及び販賣の方法並に日本、印度其の他競争諸國間に起つた商工業上の變化」によると見るべきである。（印度貿易に於ける國際間の競争）爲替の人爲的作用が印度關稅委員會に於ても注意されてゐるが、「圓價の下落は一九二四年十二月に停止し、一九二五年及び同年以降一九二七年中期まで着々として昂騰し、この間に於てさへ日本の對印輸出は異常に増加して居るのである」〔前掲書〕ダンピングもまた全く根據なきものであつて、それは「國內市場より低廉な價格で販賣した結果ではなくして、むしろ生産費及び販賣費を低下させた爲であり、且つ日本に於ては、特に輸出市場向の製品を多量に生産して居るが、かゝる製品の生産費は國內向生産費と比較する事は困難であり、兩者の價格を比較する基率は存在しない」のである。従つて安く賣つたからとて直ちにそれをダンピングと稱し得ないのである。勞働時間に對しては、日本は既に一九二九年七月より全織物工場の深夜業を撤廢して居るから問題とはならない、而して前掲書は

明白率直に「日本綿業の競争能力は印度の需要する各種品質に就て他國より安く製造し輸出して居る、その成功は部分的には有利なる氣候、低廉なる動力、原料及び販賣市場に關する有利なる地理的地位、相等低廉なる勞力の供給に由來し、更に部分的には工業及び商業の指導者の有する組織及び協同の能力、並に産業及び外國貿易の擴大に對する政策を毅然として實行する諸點にかゝつてゐる」と論じて居る。(前掲書)これらの原因が果して如何なる程度まで我が對印貿易を有利に導いて居るかは容易に論斷し得ないが少なくともその主要且つ根本的原因である事は疑ひを容れないのである。

印度の綿製品保護政策

以上略述した通り、我が綿製品の對印輸出は生地、晒色綿布共に累年増進を續け生地綿布は斷然英國品を壓し、他の二者に於ても英國品の減少するに反して却つて増加を示して居る現状にあるが、印度の綿布關稅は殆んど之に比例して加重さ

れて居る觀がある。試みに一九三〇年以來今日に至るまでの増徴を表示すると

一九三〇年二月末まで	收入關稅	一割一分
同 三月一日より	同	四分増(計一割五分)
同 四月三日より	保護關稅	五分増(計二割)

但し英國品は従前通り一割五分、尙ほ生地綿布には特稅あり、即ち前記課稅によるか若しくは一ポンドにつき三安半の從量稅による、

一九三一年三月一日より	收入關稅五分増(計二割五分)
同 九月一日より	附加稅として全稅率の二割五分引上

かくて英國品は二割五分、その他は三割一分二厘五毛となつてゐるものが、一九三二年の引上げによつて英國品は従前通り二割五分なるに對し、その他の諸國より輸入されるものはすべて五割、但し生地綿布には從價五割若しくは從量一ポンドにつき五安十四分の一か何れか高き方と改正し、この新關稅は一九三三年三月三十一日まで有効とされたのである。

右の英國品に對し「その他」とあるも事實は日本よりの輸入を防壓するのが目的であるのは謂ふまでもない。而して英國品に對する特惠的優遇、即ち日本品

に對する差別的賦課は、明らかに日印通商條約の規定に背反して居るのである。この點に關してはかつて松平駐英大使より英國政府に抗議したに拘らず、終に默殺されて今日に至つたものであるが、明治三十七年に締結した日印通商條約第一條には「日本國皇帝陛下の版國內の生産或は製造にかゝる物品は印度國へ輸入するに際し別國の生産に係る同種の物品 Similar products of any other foreign origin に適用せらるゝ最低率の關稅を賦課せらるべしとあり、その『別國』は印度以外の凡ての國々を指し、元より英國もその内に包含されて居ること明らかである、同條約は日英兩文共に正文とするものであるが、該條約締結の基礎となれる明治三十六年の英國政府の對日覺書には「印度に於ける日本品は印度の自由主義に基き他國品とは勿論、英國に對しても全然均等の待遇をうけて居るにかゝはらず、日本に於ける印度品は日本が他國と締結せる協定稅率に均霑するを得ない旨を述べて日印間の相互的最惠國待遇による條約の締結方を提議して來た事實から見ても別國なる言葉の中に英國が含まれて居る事は明らかである。(最近英領印度の關稅政策)即ち今回の關稅引上げに際しては、この抗議から逃るゝ爲に一八九四年の印度關稅法

第三條第五項「印度において生産せらるゝ同一製品に對する保護を無効にする價格を以て輸入されつゝありと認むる時はインド政府はかゝる物品の生産される國を指定し稅率を引上ぐるを得」なる條文を適用してゐるが何れにしても、差別的課稅が日印通商條約の精神に反してゐることは論をまたないのである。

今回の増稅率は、現行生地綿布の一ポンドにつき、四アンナ十八分の三であつたものが、五アンナ十四分の一となり、即ち從來の稅率に比し二割の増稅であり、一方加工綿布に對しては從來三割一分二厘五毛であつたものが一舉に五割と改訂されたのであるから、之は一割八分七厘五毛の増稅となり、生地綿布以上に高度の關稅が課せられた譯である。我國に生産さるゝ各種綿布にありては原料、工費共にほゞ五割宛と見られて居るが、原料の全部は輸入するものであるから、從價五割といふ如き高率關稅の補償は擧げて工費の引下げによらなければならぬ、特に原綿相場が今日以上に騰貴する際には、輸出綿布の採算は愈々困難となるであらう。新關稅の實施期は一九三三年三月末日まで有効とされてあるが、この期限内にて印度政府が之を打切るものとは到底考へられない上に、最近のオッタワ協定を見

ても分る通り、英國はあくまで英印間の特惠協約により印度の市場を獨占せんとするものであるから、我が輸出品特に綿製品に對する重壓は向後益々甚しくなるものと見なければならぬ。尤もこの特惠協定に對しては有力なる反對意見もあり、現に孟買のマハラストラ商業會議所の如き、「農業國であり、且つ工業の幼稚なる印度の如きは、特惠による利益は疑問である、印度は主として原料を輸出し、製品を輸入するのであるが原料の六割五分は英國以外の列國に、三割五分は英國に輸出するのであるから、英國の各自治領から特惠を得ても、諸列國の感情を損へば却つて實害を伴ふ」と述べ、アール・エン・ロイ氏は、若し之が(特惠關稅を指す)永久のものとするれば夫は經濟的に見て許し難い事である、ランカシャー紡績は過去二ケ年に亘つて特惠取扱ひをうけたにも拘らず、特惠により回復を期待された對印進出は甚しく振はない、今日尙ほ時代遅れの機械を運轉し、生産費切下げの唯一の途である内部の改造を斷行し得ないランカシャーが印度市場で失墜せる地歩を奪還し得るや否やは甚だ疑はしい、斯くの如き事情の下にあつてランカシャーへの特惠賦與は、印度の消費者へ永久の重荷を強ひるものである、一度搾取の性質にして

理解せられるれば、斯くの如き手段は益々人種的鬭争心を誘發せしむる恐れがある、と論じ、更に同氏は最近三ケ年(各年一月乃至九月)の左記日英綿布の輸入状況並に孟買紡績生産高を表示し、之によつて見るも、日本は最近に至つて薄手綿布の製造に轉じたが、之はランカシャー製品が高價の爲に販路を失ひ、その代りに日本品の輸出が増加したのであるとなし、かくて特惠關稅の繼續は或は日本綿布を印度市場より驅逐し去るかも知れないが、かゝる事は終局に於て、印度紡績業者の利益に非ず、又、印度消費者の利益と相反する事は謂ふまでもないと論難してゐる(三一一年四月二十九日リバーチー紙カルカッタ日本商品館報七年八月號)

第二六表 一九二九年乃至一九三二年(各年一月乃至九月)

日英綿布の對印輸出入状況並に孟買紡績生産高(單位千ヤード)

國	日		英	
	生	色	生	色
本	地	晒	地	晒
綿	綿	綿	綿	綿
布	布	布	布	布
	一九二九年	一九三〇年	一九二九年	一九三〇年
	二九一、〇六三	一六二、七五五	一三六、三八〇	一三六、三八〇
	七、二〇五	一八、九九一	四四、六六三	四四、六六三
	一〇六、九三七	五二、一四八	六八、四三三	六八、四三三
	三六二、一四五	一六二、四一一	四三、八五三	四三、八五三
	三一三、三七二	一八二、七九八	一五〇、五二〇	一五〇、五二〇
	二〇七、七三〇	一二五、六三三	七六、三四六	七六、三四六
			五七	五七

孟買紡織生
高晒棉布
色棉布

一、〇一九、三九五

一、二二四、〇四四

三〇四、〇四四

三九一、六五八

前記アール、エン、ロイ氏の論文による。

綿糸、布以外の重要對印輸出品

綿メリヤス

綿メリヤスも重要な對印輸出品であり、一九三一年度の輸出は四百十五萬留比に上つてゐる。一九二八年當時の千二百五十一萬留比に比すると約三分の一に減退してゐるが、これでも尙ほ對印メリヤス輸出では斷然列國を壓してゐるのである。

邦産メリヤスは主として肌衣、靴下として需要せらるゝのである。印度人はドテーと稱する無縫の長い布帛を腰に纏ひ、上衣には綿製シャツ(メリヤスに非ず)を用ふる者が多いから、メリヤス肌衣や靴下の需要は決して普遍的ではないが、文

化が進み、生活程度が向上するにつれて、肌觸りのよいメリヤスを愛用する者が年々に増加して來るのである。之等の趨勢に應じ印度内地にも近年メリヤス工業が續々計畫されてゐる、特にガンヂー一派の提唱せるスワラジ運動はこの種製品の自給自足を目的とし、外來品排斥を主眼として居るのであつて、この運動は政府の産業獎勵と相まつて相等の實績を擧げて居り、現にベンゴール、バンジャブ州に於ける斯業の發達は最も顯著なものがある。ある種の製品は既に外來品に對抗し得るまでに進歩してゐる、今日の處にては生産能力も少なく、技術、經營共に甚だ幼稚の域を脱しないのであるが、將來は必ず大に改良さるゝ事と思はれる。

尙ほ從來ドイツ、イタリより輸入されてゐるものは主として高級の人絹、絹毛混織品等であつたが、近來ドイツは我が輸出品に對抗する爲に、しきりに堅牢にして安價なる製品の輸出を試みてゐる。我が輸出品が數回の洗濯にて縫目が外れ、或は鈕釦の取れ易い苦情のあるに乗じて、ドイツ品は巧みに販路の開拓に努力してゐる。

今回のオッタワ英印協定により英國製メリヤスに對しては一割の特惠待遇を

與へて居るから、之もまた相應の影響を覺悟せねばならぬであらう、最近數ヶ年間に於ける各國の對印メリヤスの輸出比較は左の通りである。

第二七表 メリヤス對印輸出國別 (單位留比)

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
英本國及英領	一一六、四二二	一一八、五五五	六七、五九六	五二、八〇七
日本	一一、五一九、三一三	一二、三三四、九六七	七、六五一、三三七	四、一五八、六七四
米國	一、八六七、八七七	一、九一六、五四〇	一、〇六一、三一九	一四四、〇六一
其他	一四、五〇三、六一二	一四、三七〇、〇六二	八、七八〇、二五一	四、八一三、四四八
合計				
India Seaborne Trade による。				

絹布

我が絹布類の對印輸出は一九三一年に於て七百十八萬九千留比に上り、斷然列國を壓して居るが、一九二八年度の千三百八十五萬八千留比に比すると甚しい減少である、これは主として印度市場に於ける消費力の減退、日印爲替の奔騰した結果と見られるのである。

印度にて主として絹織物を需要する者は孟買、カラチ方面に於ける歐化婦人であつて、彼等は羽二重、富士絹、グレイプ類を喜んで着用するやうになつた。主たる輸入港は孟買である。

縮緬、縞子の類も近年著しく販路を擴張し、羽二重では絞織、綾織共に需要されてゐる、何れも絹布の有する特殊の魅惑性が婦人間の好尚をよんでゐる、支那より輸入されるものは主として絹紬類であるか、之は厚地にて耐久力に富み、且つ廉價である爲に比年輸入高を増加し、邦産に對して一大敵國を爲してゐる。

しかし、邦産絹織物と支那産絹紬との間には外觀、實質共に著しい相違があり、富裕階級の婦人は將來とても必ず我が絹織物を愛用するであらうから、景氣の恢復するに従つて更に輸出を増加するであらうと思ふ。

最近數ヶ年間に於ける列國の對印絹布輸出等は左の通りである。

第二八表 列國の絹布對印輸出比較 (單位留比)

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
英本國及英領	三四六、二四六	一〇六、五〇七	六三、四四五	一六三、五六五
フランス	六〇九、四七一	四六〇、八九六	一〇四、一九二	五四、七〇七

支那	八、八〇二、九三五	八、〇七四、六三四	六、〇二七、六九〇	五、〇一四、四一一
日本	一三、八五八、五三〇	一二、六一八、九一二	六、〇〇〇、四〇三	七、一八九、四三三
其他	八一四、七二三	九九八、三二一	三九五、六七〇	一九八、二九五
計	二四、四三一、八〇五	三二、二五九、二七〇	一二、五九一、四〇三	一二、六二〇、四一一

India Seaborne Trade による。

人造絹布

人造絹布の需要は列國共に増加して居るが印度に於ても近年著しい勢で輸入を増加してゐる。印度は本來綿布本位の國であるが、人造絹布が安價にして外觀の華美なることが印度婦人の嗜好をよんだものであらう。

即ち英、瑞伊並に我國よりの輸出は競うて印度市場で角逐を試みて居るが我國の進出が斷然列國を壓してゐる。

即ち一九二八年に於てはイタリヤを首位とし、英、瑞、日の順位となつてゐたのであるが、次年度に至るや、邦品の輸出は俄然四倍して一千四百萬留比となり、更に千九百三十年には一千五百萬留比に増加して居る。此間に於て、スウェーデン、イタリヤ共に甚しく減少し、其他に於ても、一九二九年の一千六百萬留比より、次年には

僅か一百三十五萬留比に低減して居るのを見ると、之等の減少は主として我國よりの輸出増加に原因するものと思はれるのである。一九二八—三一年に於ける列國の輸出比較は次表の通りであるか、ガンジヤ一派の猛烈なる國産品愛用運動や世界的財界不況にも拘らず、我國のみが依然として比較的増進を續けてゐるの誠意を強うする次第である。

第二九表 列國の人造絹糸及び交織布對印輸出比較 (單位留比)

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年
英本國及英領	八、四一二、二八九	四、一五五、三四三	一、二七四、四一九
スウェーデン	五、三一九、〇五六	四、三三六、八八五	一、五二九、一四三
イタリヤ	九、二六四、一六九	五、一一七、五一三	一、九六四、一九五
日本	三、〇五三、一一〇	一四、四〇〇、八六五	一五、〇三五、八五〇
其他	六、九九四、二一五	一六、四八七、〇六六	一、三五六、〇二〇
計	三三、〇四二、八三九	三一、四九八、二七二	二一、一五九、六二七

India Seaborne Trade による。

かくて、我が人絹は完全に印度市場を獨占するに至り、將來益々有望視されてゐたのであるが、昨六年九月に、印度政府は歳入不足を補填する目的で、從來の關稅二割であつたものを突然五割に引上げたのである。加之、同月英國の金の輸出禁止

に伴ふ爲替率暴騰によつて人絹市場は甚しい混亂状態に陥つた結果、昭和六年十一月乃至十二月の輸出は次表の通り著しく減少したのである。處が本年一月我國も金輸出を禁止したので、日印間の爲替相場も同じく常態に復し、之と同時に人絹の對印輸出もまた常態に復したのである。

第三〇表 本邦人絹織物對印輸出月表 (單位留比)

一九三一年一月	二、〇三一、四三五	一九三一年八月	二、一三二、〇四八
同 二月	一、六一九、三一五	同 九月	一、九〇二、三五一
同 三月	一、九二九、〇六〇	同 十月	一、三六四、六九六
同 四月	二、一七八、〇七七	同 十一月	五〇二、七二五
同 五月	二、二六〇、二三一	同 十二月	九〇〇、九六五
同 六月	二、二九三、一四〇	一九三二年一月	一、六六〇、〇〇〇
同 七月	二、四一六、八二〇	同 二月	一、三七〇、〇〇〇

(經濟月報四ノ一〇による)

今回の英印協定によつて、人絹織物に對しては既に一割の特恵が英國製品に對して許與されたのであるから、印度市場を獨占せる日本品も相應の影響を蒙るであらうと思はれる。たゞ、從來殆んど同市場を獨占して居た事と、今日の如き爲替安とは、その影響を幾分緩和するものと見られてゐる。

右の一割の特恵は、財政難に苦んでゐる印度政府の實情より見て當然、英帝國品以外の關稅増徴によつて實現せらるゝものと思はねばならぬから、その打撃は相當大なるものがあらう。しかし、邦品の品質は英伊品に比して却つて優良であり特に人絹絞縐子の如きは一般に好評を博して居るから、染色、デザインに一層の努力を拂ふたならば、尙ほ優にその地位を保ち得るであらうと思ふ。

セメント

セメントの對印輸出は向後益々有望となるであらう、本邦産セメントの印度に始めて輸出されたのは一九一四年、世界大戰に際してヨーロッパよりの輸入が全く杜絶した時に始まつたのであつて、一九二一年には百六十七萬餘留比の輸出を見たのである。其後ヨーロッパ諸國の輸出力恢復と相まつて我が輸出は一時殆んど杜絶の状態に陥つたが近年に至つて漸次再びその輸出を増加し、一九三一年には九十四萬七千留比を示してゐる。同年度に於ける總輸入價格四百六萬留比中二百五十二萬三千留比は英國が占め、日本以外の諸國よりは五十三萬留比を輸

出して居るのであるが、最近數年間の増減は左の通りである。

第三一表 セメント對印輸出國別(單位留比)

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
英本國及英領	五、一四七、六八六	四、六九四、七六五	三、六〇五、七九一	二、五二三、四七〇
ドイツ	二三一、四八一	二四三、一一九	一四八、七九四	五九、二六一
日本	五六三、二四二	六八五、九九九	一、二八四、八三三	九四七、三六八
其他	八三三、六〇二	七五四、〇四一	四六一、四〇四	五三〇、七二二
合計	六、七七八、〇一二	六、三七六、九二四	五、五〇〇、八二二	四、〇六〇、八二一

India Seaborne Trade による。

之で見ると、最近四ヶ年間に英國は約半減したるに對し、我國よりの輸出は、大分の増進を示してゐる。ドイツよりの輸出は殆んど問題とするに足りないから、ここに於てもまた日英兩國の對立を見るのである。然し印度内地に於けるセメントの製造高も近年著しく増加し、一九二九年には既に五十六萬餘トンに達して居るが、此間に立つて我製品が前記の如く再び輸出を増加し得たのは全く價格の安い爲である。即ち前記記載の總計から推算して見ても、英國品の一トン當り約五十七留比なるに比し本邦品は約三十五留比であり、之に關稅を加ふる時は、英國品

の七十留比十二安に對し、本邦品は四十八留比十二安である。一方印度産セメントは工場渡し一トン四十九留比見當である。しかし、セメント工場は何れも奥地にあるから、需要地までの運賃を加算する時は孟買及カラチ渡し大約五十七留比甲谷陀マドラス渡し約五十三留比となるから、優に競争の餘地があるのである。

(カルカッタ日本商品館報第五十三號)

印度政府にては收入の目的を以て一九二六年以來一トンに付十一留比(その以前は一トンに付九留比)また昨年十月からは附加稅が課せらるゝから十三留比十二安の重稅となり、之が爲に印度内地のセメント業が前記の如き發達を來したのである。而して、印度の同業者は最近 The Cement Marketing Co. を組織して、無用の競争を避け、生産の調節と販賣の統一を圖りながら、着々と外國セメントの輸入を防禦せんとしてゐる。

英、印産のセメントに比する時は、本邦産セメントの品質は遙かに優れて居り、且つ一般に割安であるから、需要は一層増加すべき筈であるが、邦産セメントを主として需要する船渠其他の大建築物は、英國人系統の者が概して工事を請負ふ關係

から、容易に販路を擴張し得ない憾みがある。然し、宣傳に一層力を入れ、有利なる委託或は卸賣を試み、些細なる需要にも直ちに應じ得るやうにして、その普及を圖つたならば、將來必ず充分の進出を見るであらうと思はれるが、たゞ、今回のオッタワ會議の結果、英國品に對する一割特惠は、少からず我がセメントの對印輸出を妨害するであらう。大藏省の調査による昭和七年上半期の累計は四千八百十萬餘斤、五十四萬七千餘圓に上り、前年同期の四百九十二萬三千餘斤、五萬七千餘圓に比し、著しい増加を示してゐる。金輸出禁止後に於ける特殊の事由による一時的進展たるに相違ないが、ともかくも、印度市場は我がセメント總輸出高の一割六分以上を占め、將來は益々發展せんとする傾向であるから、今回の英印特惠協定の影響が一層憂慮されるのである。

ガラス及同製品

ガラス製品は意匠が優美であり、且つ安價である爲に、腕環其の他の裝飾品として一般に需要が多い、各種の蠟類、コップ、ホヤ類も多量に需要されてゐる。

印度に於ける我が商權は主としてヨーロッパ大戦中に獲得したものであるが、戦後は漸次にドイツ並にチエッコスロヴァキア諸國の爲に侵略せられた處が多い。しかし最近數年間に於ける輸入合計が著しく減少せるに對して、我國製品の輸出高が割合に減少しないのは注目すべき現象である。一九三一年度の同品輸入合計は前年に比し約二割八分減、一九三〇年度に比すると約五割の減少に當るが、之は不景氣による消費力の減退、昨年四月、九月に於ける關稅の引上げ、並に英國金輸出禁止に伴ふ爲替の動搖等が主たる原因となつてゐる。

輸入の減退したものは、バンゲルを第一とし、次でピッツ、壺類、ホヤ、グローブ等で減退しないものは、コップ、水瓶等のテーブル用品、電氣シェード、花瓶、板ガラス等である。右の内、バンゲルはその三分の二が印度内地で製造されてゐる。従つて向後益々輸入を減少するであらう、關稅も昨年九月から引上げられ、稅關評價一打ペヤ一十二安に對し五割の稅金が課せられるから一層印度品との對抗が困難となるであらう、壺やホヤもまた印度内地の工業が近年著しく發達して海外品を壓迫してゐる。藥用大型の水色壺等の上級品を除く外は殆んど印度製品であるが、一

オンス以下の小型サイズ物は價格の點より邦品と對抗し得ないやうである、ホヤは主として我國より輸出されたが之また内地の供給が累年増加してゐる。電氣シエード、花瓶、ガス吹き製品並に板ガラス等は、製造に熟練せる技術を要すること、相應の設備を要する關係からまだ充分なる發展を見ない状態にある。

本邦品と外國産とを比較して見ると普通のコップ類並に小壺類は我國の獨占到歸してゐるが、同品種のものにてカットグラス、高級腐蝕模様等の上級品は重に英國より輸入される、押型物はベルギー、ドイツ品と我國品とが一時激しい競争を試みたが、近時邦品が優勢を示してゐる。壺類にて、酒ソーダ水等に使用するもの大型サイド物は英國、ドイツより入荷され、フアンシーガラス製品はチェッコスロヴァキアが近年著しく販路を廣げてゐる。

本品は英印協定による特惠品以外のものである。尙ほ我國より輸出するガラス製品の内譯左の通りである。

第三二表 硝子及び同製品輸出内譯 (單位千留比)

	戰前平均	一九二八—二九年	一九二九—三〇年	一九三〇—三一年
ハンゲル	五	二、二四八	二、四九五	一、九八四
ビーズ及人造眞珠	七六一	一、〇二六	九三三	五〇六
壺類	一〇〇	一、一八三	一、三七三	一、一九二
フワネル類	五八	二七六	二三六	一三五
食器	一四一	六八一	九〇四	五七四
其他製品	三三五	一、五四四	一、四七七	一、〇八一

經濟月報四ノ一〇による。

最近米國が自動機械による生産品の販路を印度、南洋方面に求めて居るが、本邦品との競争が恐らく避け難いであらうが、邦産ガラス製品は印度人間に信用厚く、特に包装の完全にして破損率の少ない爲に印度市場では多大の好評を博してゐる、無用の競争を避け、デザイン等に一層の注意を拂つたならば、列國との競争はさ程憂ふるに足りないであらうが、たゞ、低級品のみは、印度内地の供給が益々發展して、邦品の販路を抑壓するであらうと懸念される。

機 械 類

印度に輸入される機械類は大部分英本國の製造にかゝり、その一部分をドイツ、

米國が輸出してゐる。米國の進出は近年特に顯著なものがある。ベルギーも相應の輸出を試みて居る。我が輸出は戦前の一ヶ年平均六三千留比であつたものが、一九二八—二九年度の四五二千留比、一九二九—三〇年度の六三〇千留比に進み、昨年度は四八五千留比に減つたのであるが、英國は一九二八年度の一四〇・九四一千留比より一九三〇年度には一〇六・六八二千留比に減じてゐる。ドイツもベルギーも共に多少づゝ減退して居るが、印度に於ける機械の需要は將來益々増加するであらう、たゞ遺憾ながら我國の機械類製造はその設備、技術共にまだ英獨に匹敵し得ないものがあるから、さ程多くの發展は容易に期待し得ないであらう。本品は英印協定による特惠品であつて、英國は恐らく印度市場の獨占を理想としてゐるであらう。

樟腦

我が樟腦の對印輸出は一九三〇—三一年に於て九三三千留比であり、その數量は必ずしも大とは稱し得ないが、米國に次ぐ重要市場であり、印度より見るも總輸

入樟腦の過半は本邦より輸入して居る點から見、將來益々有望である。特に印度は氣候の關係からどうしても樟腦を必要とする外に、ヒンヅ、寺院にては之を燈火用に供して居る。また藥品、香料の製造に供さるゝ額も少くない、ドイツから輸入されるものは主として人造樟腦であるから、香氣が乏しい、また支那の産額は近來著しく減退して居るから、恐らく努力次第にて市場を獨占し得ないとも限らない。戦前平均の一ヶ年輸出額一、一四八千留比に比し、一九二八—二九年度の一、八三五千留比、次年度の一、九一六留比に比し、昨年度は著しく減退して九三三千留比となつたのであるが、之は主として不景氣の結果であらう。本品は元より印英間の特惠品ではない。

ビール

印度に輸入されるビールは英國品が總輸入額の約六割を占めてゐる、ドイツは英國の三分の一を占め、日本はドイツの六分の一に過ぎない、戦前平均の我が輸出は僅かに三千留比に過ぎなかつたが、近年は累年増加の氣勢にある。即ち一九二

八一二九年の三八四留比より次年度の四五八千留比に、更に一九三〇―三一年度には四六〇千留比に達した、印度の他の輸入品は一般不景氣の影響をうけて一様に減退を示して居るが、ビールのみは英獨共に多少づゝ増加して居る。

需要者は在留外人並に邦人である。印度人も漸次ビールを愛飲するやうになつて來たが彼等は主として低廉なる内地製のものを買つてゐる。印度にあるビール工場は設備も小さく、技術もまだ進歩しないから、まだ到底輸入品の敵ではない。英國品は濃色な割合に短期間に生産し得るビールを主とし、ドイツ品も合理的生産によるので品位は一定し、且つ比較的低廉である。日本品も主として外人向きに醸造してあり、風味は概して淡白であり、大部分白蠟に詰めてあり、その大半は大蠟で輸出されてゐる。

本品は英印協定の特惠品であるから、新關稅によつて、相應の打撃は免れないであらう。

靴 類

我國から印度に輸出する靴類の中、その大部分はカンバス製ゴム底のもので、革物品はカンバス製品の四分の一に過ぎない。これも主として大戰後に開拓した販路であつて、戦前平均は僅かに一萬六千留比に過ぎなかつたものが、一九三〇―三一年度には實に六百七十一萬六千留比の巨額に達した。

一九三〇年度對印輸出靴種類別 (單位千留比)

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年
カンバス製ゴム底	三、一八五	四、一一八	四、一一五
革 製 品	二、五五三	二、一四〇	一、二九四
其他(大部分總ゴム製品)	一、〇七三	二、五二三	三、三九四

主要輸出國は、日本、カナダ、チエツコ、スロバキヤ等であるがカンバス製品は本邦製品が獨占し、革製品は英國品が總額の八割を占めてゐる。

印度人は多く履物を用ゐず、概して跣足であるから、輸入靴類を需要する者は主として在留外人又は軍隊であるが、印度人も生活の向上するにつれて履物を用ゐる者が年々増加し、自然安價なる本邦産カンバス製ゴム底のものが著しく需要されて來たのである。本品が始めて印度に輸出されたのは昭和二年であつて、その

年の輸出は七八留比に止つたが翌三年には三十萬留比に達し、同四年には一躍三百萬留比、更に同五年には六百七十萬留比に達したのである。昨年九月に行はれた英本國の金輸出禁止に伴ふ爲替率の暴騰並に同月三十日から實施された關稅増率によつて、一時に六七割の値違ひを生じたので、市場は全く混亂状態に陥つたが、近來に至つて漸次輸出は恢復して來た。

取引單位はすべて、一打で、カンバスの重さ八オンスが普通である。關稅は一足につき四安又は從價二割で何れか高き方を課せられる。

耐久力の良否は本品の生命を決する要點であるが、近來、當業者間の競争の結果、品質が著しく低下して來たのは憂ふべきことである。將來の見込に對しては元より輕々に斷じ得ないが、若し耐久力に充分注意し、經濟的に使用し得るやう宣傳したならば尙ほ相應の發展を期待し得るであらう。チエツコスロヴァキヤの製靴王バターは既にカルカッタ附近に一大製靴工場を經營して居るが、彼は日本産カンバス靴と對抗する爲にスマトラに工場を建築したと傳へられる。

一九二六年以降に於ける輸入數量は左表の通りである。(單位千疋)

印度の輸入靴 (總ての種類を含む)

一九二六年	一、九一五	一九二七年	二、七七三
一九二八年	三、三二〇	一九二九年	六、七六一
一九三〇年	一〇、九二一	一九三一年	七、三〇四

(一九三一年は四月乃至十二月の九ヶ月、インディアン、ファイナンスによる)

斯くの如き驚くべき増加は主として日本製カンバス靴の輸入増加に基くものであるから若し、バター氏の如く印度に進出して製靴工場を經營するも或は可なるべきを思ふのである。尙ほ靴類は英印協定による特惠品でないから、その心配はないが、前述せる新關稅は主として日本品を對象として設定されたものであるから、その影響は決して鮮少であるまいと思ふ。

磁 瑯 鐵 器

印度は我が磁瑯鐵器にとつても重要な市場である。輸出する種類は土人用のスリブ皿、洗面器、ライスボウル、湯沸器、水差、醫療器等であるが、水火に強く、且つ廉價にして容易に破損しない特長があるので、一ヶ年三千五、六百萬留比の輸入がある。

主たる輸出國は英本國とドイツの兩國であるに、我國からは年額二百萬留比を輸出してゐる。戰前平均は僅か三五九千留比に過ぎなかつたのであるから相等注目すべき増加である。元來、ヨーロッパ大戦中に獲得した市場であるが、今日にはやゝもすればドイツ品の爲に押され勝ちであり、技術も幾分英獨品に及ばないものがあるらしい、我が製品と特に競争し居るはドイツ、チエッコスロヴァキア品である。本邦品は加工組合の商標で統一輸出される結果、印度内地で本邦品同志の競争が起りがちとなつてゐる。

邦産の品質は近來大分に改良されて來たが尙ほ一層製品の統一を圖り、瑛瑯質の剝落し易さを防ぎ、意匠圖案等に努力したならば更に販路を擴張し得るであらうと思ふ。

本品は英印協定による特惠品でない。

眞 鍮 板

印度に於ける眞鍮は主として日用の什器用、宗教上の儀式用、寺院の用具として

最も需要が廣い。我國からは戰前は殆んど輸出されなかつたが、ヨーロッパ大戦に際して始めて輸出を開始し、今日に至つては極めて重要な市場となつてゐる。一九二八―二九年度に三、五五〇千留比であつたが、一九二九―三〇年度に三、二八七千留比に減じ、昨年度は更に二、四七〇千留比に減じて居る、主たる供給國はドイツで、次に日、英の順となつてゐる。英國よりの輸入の漸次減退するに反して、我國からの輸入は割合に減じない、英國は今回の特惠協定によつて、その市場を恢復せんとしてゐる。

輸入品の内ではドイツ品が最も優れて居り、耐久力も強い。我が製品は一般にプレス技術が幼稚であると稱される。機械の改良と技術の進歩も元より必要であるが製品の統一が本品に於て特に肝要である。

陶 磁 器

印度に陶磁器の輸入されるやうになつたのは主として世界大戦以後の事であつた、戦争に際してたまたま眞鍮製品の輸入困難となり、その代用品を必要とした

のが、陶磁器の需要を喚起した原因である。

日本よりの外、英、ドイツ等より同様の製品が輸入されてゐる。需要者は概して生活程度の低い印度土人であり、その種類は土瓶、スリーブ皿、肉皿、厚手の珈琲茶碗、ライスポール等、或は電気器具、タイル、洗面臺、便器等多様に亘つてゐる。一般に實質本位の安物が要望され、この種のものに限りては日本品が殆んど独占してゐる。全輸入の八割内外を占むるものは各種の皿、一般テーブル用品であり、その内でも硬質陶器皿が首位を占めてゐる。英國製のものは専ら高級品であるが、近來ドイツがしきりに安價にして實用本位のものを出してゐる。

電気用器具も電燈の普及するに従つて近年輸入を増加して居るが、その種類はシリリング、グローブ、カッタット、クリート、タンブラス、ウイッチ等である。この種ものはドイツ品が好評を博してゐる。便器其他の衛生陶器類の輸入は將來は知らず、今日の處にては極めて僅少であり、専ら英獨の輸出にまつてゐる。

我國からの輸出は戦前平均は四二三千留比に過ぎなかつたが、一九二八―二九年二、五三五千留比より翌年には三、一四七千留比に増進したが、一九三〇―三一年

には二、一三一千留比に減退してゐる。主として關稅の増徴、並に不景氣の結果である。本品は英印協定による特惠品であるから、將來多少の影響を免れないであらう。

木 材

我國から印度に輸出する木材は主として、マッチ、關係に於ては軸木、茶、ゴム、輸出包装用としてのベニヤ板、茶箱である。我國からは、戦前には一ヶ年二、八四〇千留比のマッチを輸出したものであるが、それが關稅と印度内地に於けるマッチ事業發達の爲に殆んどその跡を絶ち今日ではその代りに軸木の輸出が増加して來たのである。經木の輸出も一時は相應の額に達したが、之も近來は印度産の雜木にて代用されるやうになつた。

右の事情で軸木、樽板が主たる輸出品であるが、戦前一ヶ年平均輸出は僅かに三千留比に過ぎなかつた。然るに近年は累年増加し、一九二八―二九年度八〇八千留比、一九二九―三〇年度二、〇七四千留比、一九三〇―三一年度二、四〇六千留比

になつてゐる。

輸出材の内、安全マッチ用の白楊材は漸増し、スウェーデン、ポーランド品と拮抗してゐる。茶箱用板に就ては英國の製茶、ゴム業者とベニヤ業者とが多く同一の資本關係で經營して居る上に、關稅の保護もあるもので、他國品を壓して居る。自然本邦品は英人の關係せざる方面に販路を求めてゐる、運賃に就て何等か便宜を圖ると共に、生産費の低下を圖り、共同輸出の途を講ずる事が必要とされてゐる。

紙 類

印度人の文化が向上するに連れて紙の需要は年々に増加し、然かもその大部分は輸入にまつてゐる。輸入紙の種類は包裝、印刷、筆記用紙を始めとしてナフキン紙、卷煙草用紙、帳簿用紙、板紙等である。

我國から輸出さるゝ西洋紙は印刷、煙草用紙、鳥の子、連史紙、包裝用紙、和紙にありては雁皮及薄葉紙、塵紙などであるが、大部分を占むるものは稻藁製板紙である、大藏省の調査によると總輸出九十八萬三千圓の内八十九萬二千圓は板紙である。

印度關稅局の掲記せる輸入高によると、戦前は僅か五五千留比に過ぎなかつたが、一九二八―二九年七五〇千留比に進み、更に、一九二九―三〇年一、〇四一千留比、一九三〇―三一年一、一〇八千留比に達し、堅實なる商勢を持續してゐる。

我國の板紙は稻藁原質であつて、麥藁による外國製に較べると、幾分重量であり且つ粘り氣が少ないとの非難があるが、我が内地に於ける板紙製造業は近來著しくその能力を増し、技術も至つて簡單であるから、今少し生産費を低下し得たならば更に發展し得るであらう。

板紙以外の洋紙にしても努力次第にて相應の輸出を試み得るであらうが、現在の處にては英獨並に北歐諸國よりの輸入が大部分を占めてゐる。

玩 具

玩具の需要も年々増加して居る、種類はブルキ製、セルロイド製、ゴム製、木製、粘土製、陶器製、紙細工等である。我國から輸出する主要なのはセルロイド並にゴム製で、戦前の對印輸出は三一六千留比に過ぎなかつたが、一九二八―二九年には一、六

四八千留比に進み、次年には一、八八四千留比に達したが、一九三〇—三一年には一、三一〇千留比に減じた。玩具の如きは農作の豊凶と一般景氣の消長によつて著しく輸入の増減を免れないのである。

我國から輸出されるものは一時は破損し易く、且つ意匠幼稚であるとの非難が多かつたが、近來は品質が著しく改善されて來た。セルロイド製品の如きは輸出検査を行ふやうになつてから一層改良されたやうである。大體から見ると我はセルロイド製品にて獨米を凌ぎ、木製品の如き輸出額は少ないが、特殊の意匠を以て好評を博してゐる。ドイツのブルキ製玩具は頑丈にして且つ安價であり、英國の陶器製高級品と共に容易に他の侵略を許さないやうである。米國よりの輸入が近來著しく増加して來たが、米國品は意匠すこぶる斬新である。意匠の點に於て我が製品は特に研究を要するものがある。セルロイド製品の染料、着色にも一工夫を要するものと見られる。

玩具は英印協定による特惠品である。

洋傘及同部分品

洋傘は印度人の日用品として益々需要を増加してゐる。けだし、長期に亘るモンスーン並に強烈なる日光をよける爲に一般に使用されてゐるのである。従前は既製品の輸入が多かつたが、近來は部分品として輸入し、印度人の職工による製造が著しく多くなつて來た。自然彼等は各國より輸入する部分品を適宜に選擇して製造を進めて居るが、我國から輸出するものは大部分フレームとハンドルであり、先端の石突、張布のカプセ金等はドイツ品が優れてゐる。布は主に英國から供給される。我國から供給されるものは近來著しく改良されて丈夫となり、ランナー(傘骨の要となりて中棒を上下する金具も高く、耐久力乏しき眞鍮製の代りに安くて丈夫な鐵製が輸出されるやうになつたので著しく需要を増してゐる。

戦前一ヶ年の輸出平均は四九一千留比に過ぎなかつたが、一九二八—二九年に一、一一五千留比に進み、一九二九—三〇年一、〇三七千留比に減じたが、一九三〇—三一年には更に八六九千留比に激減した。本品は英印協定による特惠品である。

から、多少の影響は免れないであらう。

英印特惠協約の我が對印輸出に及す影響

對印輸出品中には以上列記せるもの、外に尙ほ左の如き品目がある。(カッコ内は一九三〇—三一年度輸出金額、單位千留比)

×衣 服 類(一、八五〇)	×紡 車(四九二)	×刷 子 類(一一〇)
×鈕 釦 類(五三六)	×車 類(三三〇)	×化 學 藥 品(四三七)
石炭 コークス(一九)	×醫 藥 品(六七一)	×家 具(一九〇)
服 裝 品(一、三三六)	×器 具(九六五)	×鐵 及 鋼(五一四)
マ ッ チ(一六)	×塗 料(二〇九)	×食 料 品(二〇九)
ゴ ム 製 品(二一九)	生 糸(六五)	香 味 類(六一)
×紙以外の文具(四七四)	茶 箱(七六)	×化 粧 用 品(三三三)
木 製 品(六三四)	毛 織 物(三一九)	

右の中×印を附したものは何れも今回の英印間協定により英國品に對して一割の特惠を許容されるものであり、この特惠に關係なきものは、石炭及コークス、硝子及同製品、服裝品、鐵器、マツチ、紙及板紙、生糸、毛織物、香料、茶箱、棉花等であつて、之を

一九三〇—三一年度に於ける金額に就て示すと、日本商品の對印輸出總金額一億四千五百十一萬留比の中、僅かに一割四厘強に過ぎない、即ち特惠品目外にある之等の我が輸出品は、英國製品が絶對優勢なもの(服裝品、鐵器の如き)或は英國内にて全然生産しないもの(生糸の如き)であり、其他は何れも英國品に比して甚しい不利な地位に立つこととなつたのである。即ちこれを綿製品の稅率に就て比較して見ると、英國品は一九三一年三月の改正による從價二割又は一封度につき三安半の何れか高き方を以て課稅せられ、昨年九月の二割五分の一般附加稅を加算しても僅かに從價二割五分に過ぎないのであるが、日本品は八月三十日以後、從價五割又は一封度につき五安四分の一、何れか高き方により課稅され、且つ昨年九月の附加稅増徴の結果による二割五分の附加稅を加算すると實に從價六割二分五厘となり、英國品との差別は三割七分五厘に上るのである。次に人絹織物に就いて見ると、從來の二割五分(附加稅を含む)から從價六割四分四分の一(舊附加稅、新二割五分附加稅加算)に、人絹糸も從來の從價一割二分五厘から二割一分八分の七に引上げられた結果、人絹織物の對印輸出は一九三二年一月に於ては前年同期の二百十

一萬留比に比して四十五萬留比即ち二割一分の減退を示してゐる。我が對印輸出の減退は單に關稅増徴にのみ由來するに非ずして、印度國內に於ける國產獎勵並に世界的不景氣による購買力の減少に基く處も決して少なくないのであらうが、從來の日本品に對する差別的待遇に加へて、今回の特惠關稅が特に、長期に亘つて我が對印輸出に影響する處多きは謂ふをまたないのである。少なくとも纖維製品に限り、今回の特惠關稅は明確に、日本製品の驅逐を目的とするものであるから、向後の對印進出は甚しく困難を感ずるであらう、特惠關稅が外國品に對する關稅を引上げるか、又は英國品に對する關稅を引下げるかはまだ決定してゐない、前者ならば當然報復的關稅を誘發する恐れあり、後者ならば高價なる英國品の輸入を増加して印度人の負擔を増大し、財政收入は減少せざるを得ない事となる、而して英國代表ポールドウン氏は右の特惠關稅は英國品の輸入稅引下げによる事を述べて居るから、或はこの方法によつて實現するかも知れないが、然る時は關稅増徴の場合に比し、その影響は幾分緩和さるゝ事となるも、既に一割の特惠が英國品にのみ許容さるゝ結果、日本品の蒙る影響は決して容易ならぬものがあらう。(經

濟月報四ノ一〇、英印特惠協定とその我國對印輸出貿易に及ぼす影響)

對印輸出に關する二三の促進策

印度市場は我が貿易にとつて甚だ重要な地位にあること、ほゞ前述の通りであるが、取引關係から見ると、從來印度市場は我が商人にとつて甚しい鬼門とされて居たのである。印度との取引には油斷する勿れ、印度人と取引して利益を得るのは非常に困難であるとして一般に見られて來たやうであるが、斯くの如きはある程度までは事實のやうである。取引上の紛議は必ずしもその原因が印度人にあるものでなく、我にもまた時にその原因が存するであらうが、印度人の性格、國民性がその主要の原因をなして居る場合が決して少なくないのである。『印度人の中には人格の高潔なる人物も多いのであるが、平生吾等が接觸する印度人、然かも相當の教育を受けたる印度人にして尙ほ容易にその信義が認められない、一般に廉恥心に乏しく、節操に乏しい憾みが多い』(北澤直哉氏日印通商上の諸問題、日印協會報五〇號)ことは恐らく事實で

あらう、その取引もなかなか面倒で、大體 C.I.F. の外に色々の費用がかかる。印度の商人はよく「信用は何處に聴け」とか「問題が起つたら何處に裁定を仰ぐ」とまで細かに極めないと満足しない、その上、サンプルマーチャントが多いから取引は容易に成立し得ないやうである。(安本重治氏見) 印度の如き政治的環境に置かれた人種は、自然に猜疑心が強くなり、容易に人の言を信じない傾向もあるやうであるが、ともかく印度人との取引は常に慎重の注意が肝要である。

對印取引にて第一に注意すべき事は紛議の發生した際にはカルカッタ日本商品館の裁定に依頼し、その裁定には絶対に服従することを豫め約定する必要がある。從來發生したる紛議は多くその地方の裁判所又は商業會議所に裁定を提出されたのであるが、その結果は多く邦人側にとりて不法且つ不利益であるのを免れなかつたからである。カルカッタ日本商品館は既に幾度となく仲裁斡旋の勞をとり、また立會検査の衝にも當つて相手方の僞瞞を看破した事もあり、不當の要求を一蹴した例もあり、或は先方の徳義心に訴へてその要求を撤回させた事もあるから日本商品館の裁定を取引の一項に掲ぐる事が最も安全であらう。(北澤氏前掲論文)

而して日印貿易に發生し易き紛議を邦商側と印度商側とから觀察すると、邦商側にありては、

- 一 印度から來る註文品の要點をよく了解せず勝手に解釋を下して約定品を引受けることが多い。
- 一 先方の註文の要點が明白なる場合でも自己の好都合に解釋し、勝手に修正し見計ふことが多い。
- 一 積出期間の切迫する事などが原因となつて註文品と現品との間に品質又はデザインに相違を來すことが多い。
- 一 自家の金融上の都合から採算し得ない値段で註文に應ずる場合が多い。
- 一 粗製品、ハケ品の混入する事が多いが之等は他店から仕入れた場合に起り易い紛議である。

更に之を印度商人側から見ると、

- 一 印度人は日本品の賣行きよきものを選び、それを見本として安い値段で製作積送せしむる事が多いがその際には苦情が起り易い。

- 一 實力以上の宣傳を試みる者が多い。
- 一 印度人には寛容の美德は全然かけてゐるから、如何に親密の間柄でも不當な行爲又は手落ちがあればあくまでも追及してやまない。
- 一 印度人の採算見積りは概して粗雑である。自分の誤算による損失でも難癖のつく限りは紛議を提出する。
- 一 印度人は一般に非常識であるから、些細の事から事態を重大化する事が少なくない。

一 相場の變動にて損失を蒙つた場合などには、比較的新しい取引先きに不當の要求を爲す者が多い。

以上はカルカッタ地方に於ける紛議發生の重なる原因であるが(北澤氏前掲論文)紛議の原因が何れにあるにせよ、これによつて損害を蒙る者が日本商人に多く、利得する者が印度人に多いのは争はれない事實である。故に、前記カルカッタ日本商品館の利用は元よりであるが更に有力にして權威ある諮問、裁定の機關を設ける事が、對印輸出を促進せしむる上から見て大に必要であらうと思ふ。

輸出を促進する上に於て市場の傾向、消費者の嗜好を常に調査研究する必要があるのは謂ふまでもないが、對印貿易に對て一層その必要があると思ふ。幸ひカルカッタ日本商品館はこの必要に應じて輸出業者の満足を得んと努めてゐるから、さし當りこの機關を充分に利用するがよいと思ふ。今日異常の成功を收めてゐるゴム底カンバス靴の如きも最初はカナダ製が殆んど獨占して居り、邦産品は彼に比して耐久力も乏しく且つ仕上げに垢ぬけしない缺點があつたのを、種々需要者側の批評と改良を要する點に就て意見を聴取し、カナダ品を見本として研究の結果、終に今日の發展をもたらし得たのである。

輸入規定や手續きは深く注意して苟しくも之に抵觸しないやうにする必要がある。たとへば製品國名の表示たる *Made in Japan* も日本内地にては些細の事如く考へられるが之に違反する時は海關税法の條規に準據して殆んど苛酷と思はるゝ程の制裁を加へられるのである。この製品國名表示違反の爲に海關税法第六十七條第八項の規定によつて貨物を沒收された實例もある。それはゴム底の中央部に商標と共に商品自身の名稱として *Wellington* なる文字を浮彫に、*Made*

in Japanなる文字は該名稱より隔たりたる土踏まずの下方に小さくゴム印にて押捺してあり、しかもゴムの地色がチョコレート色なるに、そのゴム印は黒インキにて表記してある爲に甚しく認知し難い憾みがあつた。この事實に對し、税關にては、第一、ウエリントンなる名稱は英國の地名であり、海關税法第十八條のB項に規定しある偽名稱 *Falses Trade Description* であり、更に生産國名の表示が適法でないといふのである。その理由としては、生産國名表示が *Wellington* なる文字と同一方法 *in the same manner* でない、即ち *Wellington* なる文字が浮彫であれば *Made in Japan* なる文字も均しく浮彫にしななければならないのに、小さきゴムを形式的に押捺してあるから、第三者たる需要者は一見して英國品と見擬ふ嫌ひがあり、誤魔化し手段を用ひたとも解せられるのである。(副嶋八十六氏對印) 貿易業者への警告 斯くの如きは單にその一例に過ぎないが、この種の實例は實に枚擧に遑ない程である。*piece-goods made in Japan* の表示をしなかつた爲に税關通過に際して二百留比の罰金を課せられた例さへある。

始めて註文に應ぜんとする時には出来るだけ慎重に先方の信用を調査するが

よい、さし當り日本商品館に依頼すればある程度までの信用程度は分るであらう、印度でもカルカッタ方面の商人中には甚だ素性の宜しくない者、惡辣なる者も少くない、その地方の商人は主としてマルワリと稱する種族であつて、金錢に對してはとり分け執着心が強い、雜貨商人には回教徒が多く、たまにはベンガル人も居るが、清純なる宗教心を持ちながら、一面には非常に物質慾が強いのである。次に取引は漸を追ふて増進するやうにし、常に警戒を怠らぬやうにする事が肝要である。註文書其の他の文書に就ては決して間違はぬやう全文書を再讀、三讀する事が必要とされてゐる、意味の不明な場合には納得の行くまで先方の釋明を求むるがよい、印度人との取引に於て、急ぐことはむしろ危険である。

商品の品位は如何なる場合にも落さぬやうにする事が、元より必要であるが印度の場合にては、やゝもすればこの邪道に陥り易いのである。それは印度人は口錢にさへなれば薄利に満足して賣るから、日本商品を賣る店が多ければ多いだけ競争が激しくなり、競争の結果は自然に製造家を壓迫するから心ならずも粗製濫造を敢てするやうになるのである。根柢のある對外商權を扶植するにはあく

までも品質本位で進まなければならない。印度市場に於ける日本商品の不評判の重なる原因は、如上の原因から餘儀なくされて漸次商品の相場を安くする事が數へられる、一たび安くした商品は容易に信用を回復し得ないものである。

奥地との取引に至つては、上に述べたやうな種々の不安、危険が一層甚しいのであるが將來の對印貿易に更に一段の發展を求めんとするには、ある程度まではこの不安、危険を冒して奥地へ進むだけの覺悟を要するであらう、それにはあくまでも官民一致の努力にまたなければならぬが、さし當り輸出補償制度を擴大して印度市場をも之に包括せしむる必要があるであらう。(安本重治氏貿易合理化の目標)

對印貿易の將來の動向を卜する事は決して容易の業でないが大體より見て、
一 我國より輸出せらるゝ綿製品等に對しては將來關稅の壓迫が益々加重して來ること、

二 更に印度に於ける紡績業も漸次その規模を大にすると同時に、粗より精に進むべきこと、

等は恐らく近き將來に於て實現するであらうと思ふ、吾々は前掲ボース氏の所説の如く、日本の對印輸出が將來減少するものとは決して思はないが、また印度が自國製品を以て外國品を驅逐するまでには相應長期の歳月を必要とする事を思ふ者であるが、しかし、我が綿製品は更に發展を求めんよりも、むしろ現有勢力を保持するに一層の努力を要するではないかと信ずるのである。印度人には概して工業的智識が甚だ乏しく、その技術も至つて幼稚であるが、斯くの如きは英國の統治方針に由來する處が多いのであつて、今日までの處では幼稚であるのがむしろ當然の結果と思はれるのである。が、既に時勢は急變し、印度人の自國産業に對する熱意は甚だ熾烈なるものがあると共に、ガンヂー一派の國產獎勵運動も更に具體化して、海外製品の輸入に一層の威壓を加へるであらうと思ふ、斯の如き情勢から見る時は、我が綿製品の對印輸出は前途甚しく多事多難であるが、(北澤直哉氏日印通商上の諸問題)之に反し、所謂雜貨類の對印進出は更に益々有望なるものがあるやうに思はれる。印度市場に輸出される雜貨はその種類が極めて多いが、主要なるものを擧げると、

蘭草花莖類、洋傘及部分品、化粧品、賣藥、工業藥品、ビール、蚊取線香、蚤取粉、卓上電氣

扇類、白髮染、刷子類、砂糖、調味料、生果、ビスケット、洋菓子類、洋紙、板紙、玩具類、鉛筆、手帳、其他の文房具、眼鏡、椽、運動具、カンバス靴、帽子、靴下、ハンカチーフ、蓑口、革製品、櫛、其他セルロイド製品、剃刀、鋏、ニッケル製品、硝子製品、建築諸材料、懐中時計、電燈用具、縫針、紐類、腕環、

等であるが、大體より見て印度人は安物を好む國民であるから、高級品よりも低級品に主力を注ぐべきであらう、高價ならず、疎製品ならざる實用品の市場として印度は我國の最大市場でなければならぬ、「高級品を作つて歐米品と競争するは愚であると論ずる」者さへある(千田幸妻太郎氏)然し、一面に於て、印度の如く連年巨額の輸出超過を續け、金銀の流入の多い國では、國民の生活程度は漸次向上し、必然的に高級の外國品を需要する傾向があり、現に近年に於ける印度の輸入状態を見るに、自動車、絹織物、蓄音器、時計、罐詰、卷煙草、酒、フィルム、化粧品等の輸入が漸次に増大して居るのは之が實證であるから、徒らに舊來の取扱品に囚はれず、一步進んで技巧品を以てこの大勢に乗じて行く必要を説く人もある。(安川雄之助氏本邦品輸出市場としての英領印度)印度の一般消費者が貧乏であり、購買力の少ない事は明らかなる事實であるから之

等には安價にして實用本位の貨物を提供し、文化の進んだ印度人、並に在印外國人相手には須らく技巧品の輸出を試むべきであつて、精粗に偏せず、高下に囚はれざる處に我が對印輸出の將來が暗示される様に思はれる。

尙ほ我が印度貿易に就て注意すべき事は、既に縷述した通り、大量製品である綿製品がその大部分を占むる關係からその取扱利潤は至つて薄い、自然大規模の取引をしなければ經費を償ひ得ない状態であるから、我が對印貿易は比較的少數の大貿易商に集中する傾向がある。カルカッタ通信員の調査によると、印度輸出の五割輸入の二割五分が此種の大貿易商の取扱に屬してゐる。綿製品に限らず、各種の雜貨類にしても印度の商賣は概して薄利であるから、その販賣には特に苦心を要するのである。共同販賣制を行ふのも一策であらう、奥地向きの販路を擴張するには一層その必要を見るが、品種、等級、賣値、支拂條件等を協定し、或は信用ある代理店 Agent に委託するとか、何れにしる、共同の力によつて危険を分擔し、組織的に統制ある販賣策を講ずる事が、對印貿易を發達させる根本の要件であるやうに思はれる。(前掲安川雄之助氏論文)特に印度内地の各種産業は年を追ふて益々進歩し、關稅の

増徴もまた一層苛重ならんとする際に當り、今日以上の販路を開拓する事は極めて至難ではあるが、我が對外貿易の現状より見て、印度市場の開拓は最も重要な事である。 (濱田徳太郎報告、昭和七年十一月下旬稿)

附記、印度の人口

一九三二年二月に施行された印度の國勢調査が最近發表されたが、それによると印度の人口は三五二、八三七、七七八にして、前回即ち一九二一年の調査に比すると三三、八九五、二九八人(一〇・六%)の増加である。英領内の人口は二四六、八五六、一九一人から二七一、五二六、九三三人に、印度各聯邦の人口は七二、〇八六、二八九人から八一、三一〇、八四五人にそれ〴〵増加した。男女別を見ると、男千人に對して女九百四十人の割合となつてゐる。都會の人口は一九二一年度の一〇・一%に比して今回は一一・〇%に増加したが、之を職業別に見ると

牧畜	一〇二、四五四、一四七	七三、七六三、一八五	二八、六九〇、九六二
狩猟	一、三〇八、二九二	一、一四五、八一七	一六二、四七五
漁業	三四六、〇〇〇	二五九、五八三	八六、四一七
工業	一五、三六一、九三三	一〇、八〇七、五〇七	四、五五四、四二六
運輸	二、三四一、四〇五	二、〇九九、一九八	二四二、二〇八
貿易	七、九一三、七九七	五、七八五、八一六	二、一二七、九八一
陸軍	三一八、〇三六	三一六、三〇〇	一、七三六
空軍	一、八六三	一、八三三	二五
警察	五二一、六七五	五一六、四一五	五、二六〇
行政	九九五、二八四	九六二、七四一	三二、五四三
政治家、美術家、労働者	二、三一〇、一四一	一、九八六、二六〇	三二、三八一
家庭労働者	一〇、八五八、二五四	二、〇九四、四八七	八、七六三、七六七
其他	九、六五九、七八四	五、八二三、三四七	三、八三六、四三七
合計	一五四、三九〇、六一二	一〇五、五六二、四九七	四八、八二八、二一八

昭和八年一月十七日印刷 定價四拾錢
昭和八年一月二十日發行 送料四錢

發行所 東京市京橋區銀座西七丁目三番地七
社団法人 日本貿易協會

編輯兼發行人 福島愛之助
印刷人 鈴木茂

印刷所 東京市京橋區築地四丁目四番地 中屋三間印刷株式會社
發賣所 東京堂、東海堂、北隆館、大東館

14.5
225

終